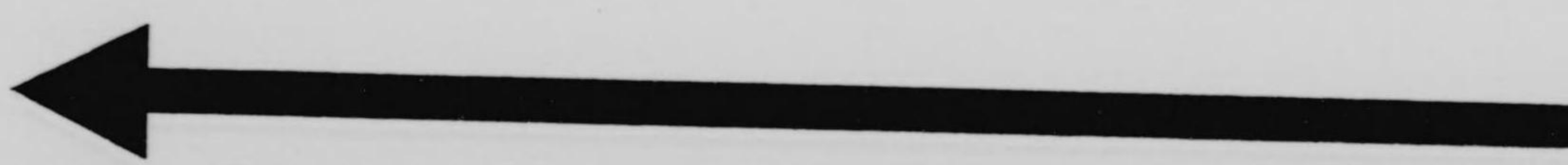


始





376-226



立 雲頭山滿先生題字  
前文部大臣 岡田良平閣下題字

山田愛劍著

養百譚

東京 忠誠堂

大正 7.11.29 內交





五子





神

養

神

也

張

雲





音

上

下

音

大正五年巳秋。

竹心堂主題





## 序

修養にその道あり。反省を以て第一と爲す。曾子の曰く、「吾れ、日に、三つ、吾が身を省みる。」と。斯くの如くにして怠らずんば、向上又た向上、聖賢の域に及ぶ、亦た、甚はだ難からじ。

反省にその道あり。内、良心に質すも可。外、人言に鑑みるも可。古人の言行、事蹟に徴して、己れの足らざる所を補ふ、最も可。貞觀政要にいふ、「古へを以て鏡と爲さば、以て興替を知るべく、人を以て鏡と爲さば、以て得失を明かにすべし。」と。眞に



然り。

乃はち、古人の言行の反省の料たるべきもの數十種を蒐めて、讀者に薦む。挿むに寓話を以てす。寓話にも教訓あり。亦た、好個の反省資料たるべければなり。

題して修養百譚といふと雖も、著者の意は、右の如し。寧ろ話の庫、話の種など稱するを適切とせんか。この一小著をして、能く修養書たらしむると否とは、一に繋りて、讀者の用意如何に在り。

著者謹識

格書 對照 修養百譚 目次

第一 修德

- 1 伊藤仁齋の篤學……………一
- 2 燧木の所在……………四
- 3 ダイオゼニス人を索む……………六
- 4 犬の目と人の目……………九
- 5 大石良雄の素養……………二三
- 6 傳家の寶刀……………二七

第二 誠實

- 1 近江の馬士某の正直……………三三

目次



第三 謙遜

2	蜘蛛扱ひ	二六
3	司馬温公誠實の訓へ	二八
4	羊飼の小僧	三〇
5	室町の孀の無私	三三
6	門と驢馬	三五
1	貝原益軒と楠公碑	三九
2	角のある馬	四三
3	中江藤樹師たるを好まず	四六
4	子殺し豫言者	五一
5	伊藤仁齋の井戸浚へ	五四
6	牡牛と蛙	五六

第四 克己

1	豊臣秀吉侮辱を忍ぶ	五九
2	姑耶山の狐	六三
3	本多正信の名言	六七
4	黄金の卵	七〇
5	白隠禪師怒らず	七一
6	阿難を慕ふ女	七五

第五 反省

1	徳川忠直の納諫	八〇
2	鏡の影法師	八五
3	結城秀康と舞妓お國	八八
4	貧乏神の出現	九〇



第六

言語

- 5 三百石取りの次男…………… 一〇六
- 6 俺は誰?…………… 一〇七
- 1 本多重次の直言…………… 一〇八
- 2 賢しき女…………… 一〇九
- 3 漢の朱雲言を盡す…………… 一一〇
- 4 野中の剽盜…………… 一一一
- 5 赤穂の二士使命を辱かしむ…………… 一一二
- 6 不出来な女房…………… 一一三

第七

勇氣

- 1 松平信綱金鐵の心…………… 一一四
- 2 金剛力士…………… 一一五

第八

勤儉

- 3 掃部と方齋齋を語る…………… 一二〇
- 4 子山羊の強がり…………… 一二一
- 5 矢田作十郎の金鯉の兜…………… 一二二
- 6 報復の秘法…………… 一二三
- 1 スコットの勤勉…………… 一二四
- 2 蜻蛉の失敗…………… 一二五
- 3 井伊直孝の儉素…………… 一二六
- 4 蚯蚓と兜虫…………… 一二七
- 5 岡野左内黄白に執せず…………… 一二八
- 6 石部金吉の資本…………… 一二九

第九

君臣



1	松平定信の忠誠……………	一五
2	番頭の百年目……………	一六
3	小野寺十内の書翰……………	一六七
4	老獵犬の嘆き……………	一七二
5	太田某の直諫……………	一七四
6	農夫とその僕……………	一七七
<b>第十 父子……………</b>		
1	龜田久兵衛の至孝……………	一七九
2	ベツカツ孝……………	一八三
3	農夫次左衛門無我の孝……………	一八七
4	親猿と子猿……………	一九三
5	近江の新六孝を知らず……………	一九五

**第十一 夫婦……………**

6	牝鶏と蛇の卵……………	一九七
1	浪花の鶴女二夫に見えず……………	一九九
2	珍無類の夫婦喧嘩……………	二〇一
3	奥平家某の妻髪を断つ……………	二〇八
4	女房の差出口……………	二一一
5	松平定信と妻峰子……………	二一四
6	娘の兩肌脱ぎ……………	二一六
<b>第十二 兄弟……………</b>		
1	西郷南洲の友愛……………	二一九
2	足の不平……………	二二五
3	俳人丈草の家出……………	二三五



第十三

朋友

4 蛇の頭と尾……………二二八

5 奥左衛門の二子……………二二〇

6 弟の述懐……………二二四

1 新井白石友に譲る……………二二七

2 熊の囁き……………二二〇

3 西郷南洲と僧月照……………二二五

4 するい蝙蝠……………二二八

5 中倉忠宣とその知友……………二二八

6 古家の鬼……………二二五

第十四 知足……………二二五

1 徳川家康充分を願はず……………二二五

第十五

雅量

2 宥坐の器……………二二九

3 張良自ら盲進を戒しむ……………二六一

4 鼻の取り換へ……………二二六

5 徳本の藥代……………二二六

6 庭の梨の木……………二七一

1 呂蒙正と小役人……………二二五

2 鶴籠の坊さん……………二七五

3 徳川家康越中を宥す……………二二六

4 三人不具者……………二八三

5 石田三成の大腹中……………二八五

6 牡牛と蚊……………二八六



第十六 仁愛 ..... 二九〇

1 加藤清正女乞食を救ふ ..... 二九〇

2 雀の嘆聲 ..... 二九三

3 龜眼禪師の窮民救済 ..... 二九六

4 愚かな護送者 ..... 二九九

5 馬士孫兵衛の親方 ..... 三〇一

6 驢馬と蛙 ..... 三〇五

第十七 公益 ..... 三〇八

1 二宮尊徳一代の事業 ..... 三〇八

2 摺鉢の不平 ..... 三一五

3 米屋與右衛門の陰徳 ..... 三一九

4 衆生の恩 ..... 三二二

5 手島塔庵の教化 ..... 三二八

6 槍持ちと金持ち ..... 三三三

第十八 名譽 ..... 三三九

1 成島某の憤死 ..... 三三九

2 無一物を寄越せ ..... 三四一

3 西郷南洲名を念はず ..... 三四四

4 損料借りの失販 ..... 三四八

5 善く射る者某 ..... 三五三

6 魅された村人 ..... 三五八

第十九 意氣 ..... 三六二

1 新井白石富豪の婿たらず ..... 三六二

2 靈山の蛇 ..... 三六八



第二十 趣味

3	後藤政次の答へ	三七一
4	齊人屐足の道	三七五
5	ハーバー屈辱を忍ぶ	三七六
6	海鼠の怪氣燭	三八二
1	松尾芭蕉の俳生涯	三八六
2	鹿の鳴音	三八六
3	松平定信の壁書	三八九
4	隠居の疝症	三九四
5	表太の奇行	三九七
6	文晁の鶴	四〇一

第二十一 貧富

四〇七	桃水和尚の快生涯
四一四	火中の綿服
四一六	一袿梨一の清貧
四二〇	狸の化け損ひ
四二五	龜田窮樂の洒落
四二八	鬚剃り志願

第二十二 死生(その一)

四三二	小西來山の辭世
四三四	驢馬の價值
四三八	赤穂義士の超脱

第二十三 死生(その二)

四四九	北叟笑み
-----	------



目次

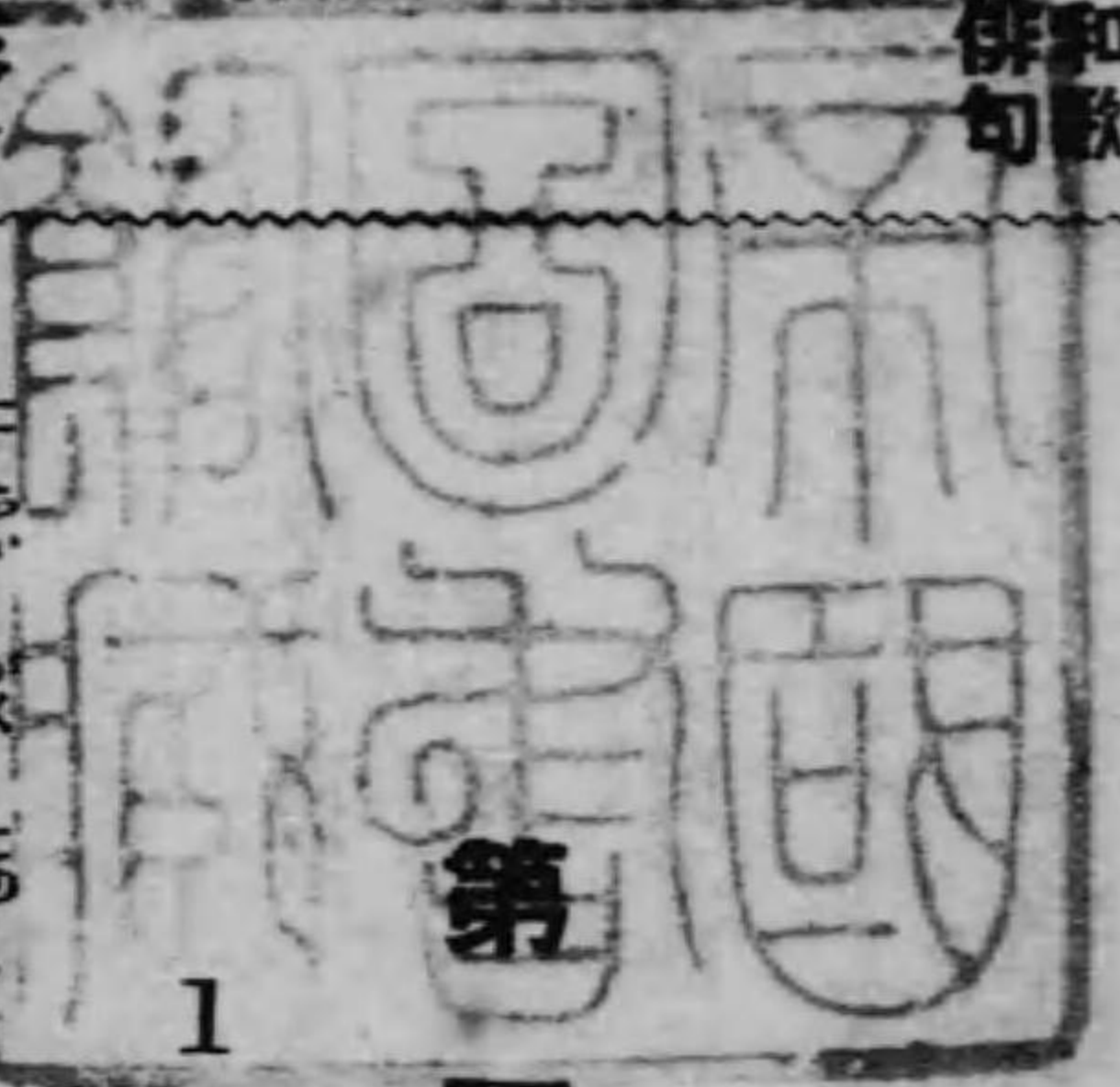
5 佛光國師白刃を嘲る……………一四

6 盆中の蛇……………四九

—目次終—

上欄  
格言  
俚言  
和歌  
俳句

◎人の多  
も人の中  
なき人の  
なれ人々  
爲せ人々  
古歌人と



格言  
對照  
修養百譚

山田愛劍著

修德

I 伊藤仁齋の篤學

古來、學を好んだこと伊藤仁齋の如きはないであらう。學問の要は、道を知るに在る。精神を修養して、人らしい人になること、これが學問の目的である。金儲けの爲めに學ぶのではない。名聞の爲めに學ぶのではない。すべて、報酬を以てかけてのことではない。一個の道德的人格を大成することが出来れば、復た望む

伊藤仁齋



◎人生の勞  
一ありの  
事ありの  
立志これ  
なれば  
難目難  
難目難

所はないのである。能くこの間の消息を解して、専心一意、學問の事に従ひ、名も要らぬ、利も要らぬ、願はくは、人らしい人になりたいものとはかり、身の貧富、人の毀譽に拘はらなかつた仁齋は、古今無類の篤學者といつてよい。

仁齋、名は維楨、通稱源助、京都の人である。父を七右衛門といひ、七右衛門に三人の子があつて、仁齋は、その長子に當る。寛永四年七月、京都堀河に生れた。家は、商家であつたけれど、幼少の頃から、讀書に耽つて食事をさへ忘れるといふ風、常々、

「私は、學問で世に立つ心組ぢや。」といつてゐた。で、年の稍長するに及んで、家を弟に譲つてしまひ、他へ別居して、日に、夜に、學事にいそしんだ。

斯くて仁齋の學問は、日一日と上達した。二十八九歳の頃には、最早や、一廉の學者になつたが、顧みると、家産は殆んど傾いた。自然、親類などから苦情が出すにゐない。一同、協議の上、

◎后靈皇太  
かから心新  
かばらまし  
はのかか  
り焼けり  
り焼けり

「學問は、支那人のする事だ。第一、賣れが悪い。それよりも、醫術を修めて、生計の道を立てたら何うだ？」と忠告した。學問の目的が那邊に在るかを知らなかつたのである。仁齋、素より聴くものではない。

「いや、あり難う。」とのみ答へて、斷じて志を曲げなかつた。

爾來幾年、仁齋は、赤貧、洗ふが如きの苦境に陥つた。けれど、少しも意に介せず、晏如としてその赤貧に甘んじた。或る年の暮の事、浮世の人が、足を空に東奔西走、舊を送り、新を迎へる營みに忙殺されてゐる折柄、仁齋は、獨り書齋に閉ぢ籠り、机に寄つて、眼を聖賢の書に曝してゐた。すると、妻が来て、

「何んなに貧乏いたしましたしても、妾は、露程も厭ひませぬ。たい倅原藏が、お友だちの家に餅があるのを見て、切りに欲しがり、ねだりますので、それを聞く毎に、口では叱りつけますけれど、餘りの不便さ、胸も張り裂けるばかりでござりまする。」斯ういつて、よゝと泣き伏した。仁齋は、それには答へず、羽織を脱い







◎道は近  
きに在り  
反りに在  
るに在り  
にれを速  
く求む  
孔子

◎飽食  
居し  
衣居し  
教へし  
にれを  
歌に  
孟孟  
子子

呉れ。」と、友だちの提灯を借りて、裸の儘、庭へ降りたり、裏へ出たり、又た、表へ駆け出したり、頻りに舞ひ廻る。友だちは、合點が行かない。

「八兵衛、何するのだ？」と尋ねると、

「何、洋燈が消えてるから、燧木を捜すのよ。」

結構な提灯を手にしてゐながら、燧木を捜すとは、さてさて、狼狽へた八兵衛ではあるけれど、昭々靈々、明かな良心、本心を備へ、それに従ひさへすれば、直ちに道に協ふものを、道を遠方に在るものと心得るのは、殆んど八兵衛の愚に近い。

### 3 ダイオゼニス人を索め

横目堅鼻、二本の手と二本の足を具へたもの、これが人である。形體の上から見て、彼れは、確かに人である。精神上に於ては如何？ 世に多いやうで少い

ものは、人である。人は、何を措いても、先づ、人とならなければならぬ。

昔し希臘に、犬儒派といふ哲學の一派があつた。人は、自然に従つて生活すること、犬の如くでなければならぬ、と主張したものだ。さては、そんな名が生じたのである。であるから、同派の哲學者等は、富貴を希はず、財産を求めず、金銭に手を觸れることをさへ不快の極と考へて、清貧の狀、殆んど乞食に近かつた。

中にも甚はだしかつたのは、同派の泰斗ダイオゼニスの生活振りである。身には、たゞ一枚の大風呂敷様のものを纏ひ、年中、跣足で歩き廻り、夜になると、大きな壺の中で寝た。唯一の財産、唯一の持ち物は、一つの水飲枕であつたが、一日、戸外をうろついてゐると、一人の子供か、兩手に水を掬ひながら、がぶがぶと飲んでゐる。と見たダイオゼニスは、

「は、あ、あ、して飲めば、椀も何も、要りはせぬ。」斯ういつて、件の椀をさへ捨て、しまつた。

◎誰か探れ  
人か探れ  
貴か探れ  
それか探れ  
元古歌



◎徳孤な  
らず必ら  
す購りあ  
り……孔  
子

けれど、何分、大哲學者のことであるから、その盛名は、何時しか、彼の有名な歴山大王の耳へ入つた。大王は、波斯征伐に出かける途中、態々、訪ねて往つて、種々、問答を試みた末に、

「卿は、何か朕に望むことはないか。遠慮は無要、所望するがよい。」と、その申出を待つた。この變り者、何を望むか。

「別に所望とはありません。たい、陛下がそこにお立ちになつてゐると、太陽の光が来ないので、私は、寒くて仕様がなです。何卒、少し何方かへ寄つて頂きたいもので……」奇抜極まる所望！こゝに於て、大土は、

「あゝ、朕が歴山でなかつたら、ダイオゼニスになつたであらう。」斯ういつて喟然として嘆息した。

一日の事、晝日中、提灯を提げて、アゼンの町を歩いてゐると、

「先生、何をしてゐなさる？」と尋ねる者がある。

「俺は、人間を捜してゐるのだ。」

「人間？ 人間は、こんなに澤山ゐるぢやありませんか。」

ダイオゼニス、それには答へず、突然、大聲を發して、

「人間、集まれッ！」と一喝した。道行く人は、びつくりして、周囲へどやどやと集まつて來た。ダイオゼニスは、それを見て、

「汝たちが人間なものか。犬だ！ 猫だ！ 馬の糞だ！」と叱りつけ、棒を揮り廻して、勢ひ猛に、追ひ散らしてしまつた。

まこと、至つた人の眼には、世人の多數が、犬とも、猫とも、將た、馬の糞とも見えるのであらう。人は、何を措いても、先づ、人とならなければならぬ。

#### 4 人の目と犬の目

道は、近きに在つて、至正明白、知り易く、従ひ易いものであるけれど、多く

人の目と犬の目

◎玉琢が  
ればさ器  
成れば器  
を成れば  
人なれば  
知れば  
禮記







の窩へことりと嵌めて、

「何うだ？、見えるかい。」

病人は、狗の眼が混つてゐるとは知らず、きよろきよろとして、

「はい、よく見えます。」と恐悦がる。醫者は、可笑しくて堪らない。

稍あつて、

「見えるね？……時に、何か變つた事はないか。」醫者が尋ねると、

「はい、別に……」

「ないか。否、何か變つた事がある筈だが……」

「成程、然う仰しやると、少々、變でございます。先刻、便所へ参りまして、下

を覗いて見ますと、右の眼では、汚なく見えるのが、左の眼では、何とやら、好

ましく見えました。」好ましいいわけ、左の眼は、狗の眼である。

人も、動もすると、好ましい筈の善が汚なく見えて、汚ない筈の悪が、好まし

◎知は「瞳」の如く歩  
能く外を見  
て自らを見  
ず瞳を見  
非子：瞳を見

◎どれ見  
ても咲き  
劣りし  
花の角  
：其角

く見える。畢竟、その眼が狗の眼であるからである。人の眼でないからである。  
人の眼は、本心の眼でなければならぬ。

### 5 大石良雄の素養

元禄十六年二月四日、赤穂義士四十七人が、それぞれ、切腹を仰せつけられた時、大石良雄以下十七人を預かつた熊本城主細川越中守綱利は、

「揃ひも揃つた勇士どもで、何れ、優り劣りはない。」と嗟嘆したとか。げに、その義心、その武勇に於ては、四十七人、斷じて優劣はなかつたであらう。けれども彼の一黨を統率し、彼の一舉を指揮して、事を誤まらなかつた良雄の人物は、最も偉大としなければならぬ。そして、良雄の人物を造り上げた所以のものは、その平生の修養に在つたのである。

乃木將軍の崇拜人物山鹿素行は、前には、承應二年から萬治三年迄の八年間、



◎馬選足  
ないに閉  
はもとれ  
其はもと  
美はもと  
と難はも  
と君はも  
れを君は  
と爲はも  
論治家

赤穂侯浅野長直(長矩の祖父)の客となり、後には、寛文六年から延寶四年迄の十年間、誦されて赤穂に在った、素行は、當時の大兵學者である。赤穂の士が、就いて學んだ事は、疑ひのない所である。素行が赤穂を去つた延寶四年は、良雄十七八歳の時である。これ亦た、素行によつて益を得た一人だつたに相違はない。素行の日記を見ると、寛文六年十月、赤穂へ来た當時の條中に、「二十四日、大石氏(兄弟)、岡林氏(奎之助)、藤井氏(又三郎)等、來問。」とある。所謂大石氏兄弟は、内藏助の祖父良欽、その弟良重の事で、この二人は、素行と親しく來往したものでらしい。

良雄は、平生、論語を愛讀した。前に記した伊藤仁齋は、恰度、この頃の人で最も論語を敬重し、

「聖人の學は、論語一卷に盡きる。」とさへ切論した。論語好きの良雄は、仁齋の門に在った同藩の士小野寺十内の紹介によつて、屢ば、その講筵に列した。

◎人の己  
れを知ら  
ざることを  
人を思へず  
とを思ふこ  
とを思ふこ  
とを思ふこ  
とを思ふこ

こゝに一逸話がある。良雄は、何んな書物を読む場合にも、大義を了することを中心として、字義や出典に就いては、餘り頓着しなかつた。今、仁齋の講筵に列しても、口角泡を飛ばしての義理の談には、飛耳張目、一言半句も洩さじと、熱心、聽聞するが、字義のくだくだしい説明になると、何時も、坐睡を始める。すると、他の門人等は、憤慨して、

「あんな懶惰生は、初めから學ばない方が勝した。」と罵つた。たゞ仁齋は、良雄の人物を見て取つて、

「お前がた、妄りに誘つてはならぬ。俺の見る所、彼れは凡庸の器ぢやない。きつと大事に堪へるぢやらう。」といったとか。流石は仁齋、人を見るの明があつたのである。

良雄は、毎朝、論語一章づつを讀むことを日課としてゐた。又た、論語をその子主税に授けたとのことで、父から、復讐の舉に對する去就を問はれた時、主税



◎文事あり武備あり

「私とても、大義の分は辨まへてをりまする。」と言葉清しく答へたが、それにはその素があつたのである。

良雄は、又た、大石瀨左衛門、潮田又之丞等と共に、讃州高松の大劍客奥村無我に就いて、武術を學び、遂に免許皆傳をさ得へた。

起請文前書の事

一、東軍流の兵法、御相傳に就いて、無免已前、聊さか他見、他言申す間敷事。

一、免已後、他流を交へ、別に一流立て申す間敷事。

一、免已後、誓紙無くして、帯刀、見せ申す間敷事。

右の條々、違背するに於ては、梵天、帝釋、四大天王、伊豆、箱根、三島大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神、摩利支尊天、總じて日本國中の大小神

禊、御罰、蒙むる可き者也。

仍りて起請文、件の如し。

元祿五申年六月二十日

大石内藏助良雄

奥村權右衛門殿

これは、當時、良雄の差し入れた起請文である。元祿五年は、良雄三十五歳の時である。身は國老の榮位に在つて、この年迄、修業した良雄の篤志は、甚はだ異とするに足らう。而も、これ、良雄が能く一大人物となり得た所以である。

傳家の寶刀

人は、萬物の靈である、といはれる。而も、人をして萬物の靈たらしむるものは、その心である。人の財寶、心秤貴いものはない。貴いものは、貴く使はなければならぬ。至心、全力を擧げて、區々たる金儲けの事位に費し去るのは、所

傳家の寶刀

◎類もなきは實と心知な

何物と心知な

外何物と心知な

代何物と心知な

手何物と心知な











## 第二 誠實

### 1 近江の馬士某の正直

◎正直の頭  
に神宿る  
る………  
る………

誠實とは、言行の相一致することである。行ひに表裏のないことである。欺かないことである。物を隠し立てしないことである。即ち、正直なことである。人は、正直でなければならぬ。誠實なる人のみが、世に處し、人と交はつて、その信用を博することが出来る。

京都の旅館へ泊り合せた旅人二人。一人は若い武士、一人は商人風の男。商人風の男は、

「成程、世には、捨てる神もあれば、拾ふ神もあるものですな。」と、こゝに一場の話が始めた。

◎卒爾  
み身心  
まると  
得て心  
何事  
厚く  
め厚く  
鳥堵  
手し

この男、大阪邊の者である。主人の用事で旅をする途中、江州路を馬で通し、左ある宿屋へ着くと、晝間の疲れに、ぐつすり、一寝入りして、夜半に、ふと目を覺した。そして驚いた。大枚二百兩の金を馬の鞍に置いて置いた切り、とんと打ち忘れ、その儘、馬士を返してしまつた。二百兩といへば、容易ならぬ大金である。加に、主人の金とあつては、驚かすにみられない。男は、殆んど色を失つた。

「自分の不注意から、飛んだ事をして除けた。主人に申譯がない。言葉の詫びでは叶ふまいし、萬一、疑はれでもした日には、自分の不面目は素より、親、兄弟にも迷惑をかけ、又た、店の名折れにもなる。この上は、死ぬの外に道はない。」と思ひ定めて、襦を這ひ出し、紐を手にして起つた時、表の方に聲があつて、ほとほと戸を叩く。

男は、突嗟に、

近江の馬士







2 蜘蛛扱ひ

◎天手一人以人の目  
難しひ得  
季難し

世間の小才子、小利口者は、頻りにごまかしをやる。ごまかし終せることか、人にも眼があつて、忽ちその尻尾を見て取る。「正直は、最良の方便なり。」といふものを、然りとては淺薄な!

丁稚の長吉が店に半睡つてゐると、甲高い内儀さんの聲があつて、

「長吉! 長吉! お客様はお歸りだ。奥の酒や肴を臺所へお運び。手不足で困つてるのだからね。」といふ。欠伸混りに、

「はい!」

と答へて、長者は、奥へ行つた。奥には、硯蓋やら、小鉢やら、旨い物が勢揃へをしてゐる。長者の眼も、さよふつかすにゐない。

「此奴は豪氣だ!」と、先づ、硯蓋から検分を始める。

◎食事を爲すは  
何食する  
強に取過

「は、あ、雞卵焼きか。たつた一切れとは、よく食つたものだ。次は?……蒲鉾だな? これも結構!」と、一切れ摘んで、口へ頬張り、隣りを見ると、飯蛸が七八つ、南京の井の中に、圓く陣取つて、坐禪をしてゐる。

「あり難い! 失敬ながら、俺の大好物ぢやないか。あり難い!」  
「ありが鯛なら、芋虫や鯨」と來らあ。「耗らす口を利きながら、手を出して摘む所へ、南無三寶、旦那の足音! 目つけられては大變と、突嗟の思案に、袂へ押し込んだ迄はよかつたが、俯向いて、銚子、盃を取る拍子に、ころくと轉がり出した。

主人は、目敏く見答めて、

「そりや何だ?」

長吉、それには答へず、疊を叩いて、

「一昨日来い! 一昨日来い!」

何程、蜘蛛扱ひにしても、飯蛸は、蜘蛛には見えない。白は白、黒は黒、世間

めんなんが添  
然らばなり  
へん物は添  
なくんは添  
て食ひな添  
まさるは添  
未ださるは添  
の至らさるは添  
るの川は添



の眼は滅多に見誤まらぬ。鷺を鶏とごまかしても、人は、承知しないのである。

3 司馬溫公正直の訓へ

◎食いた餅に書  
世は中れはす  
誠でなれば  
りや問にげ  
合は問にげ  
ぞは合は問  
鳥堵庵手ぬ

西郷南洲は、「事、大小となく、正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ゆべからず。」といった。人間萬事、誠を以てするのでなければ、或る場合に於て必らず失敗があり、必らず頓挫がある。誠の修行は、何の所から着手するか。嘘を吐かないこと、言行の相一致すること、これが誠の第一歩である。

◎修心の  
三つ日  
要仁つ日  
明く日  
温公司馬武

司馬溫公の名は、幼時、壺を割つて、溺れやうとする友だちを救ひ出した事によつて、普ねく世間に知られて居る。字は君實、宋の陝州の人で、初め進士に擧げられ、仁宗、英宗、神宗、哲宗の四朝に歴事して、位、丞相に至つた。死んだ時には、太皇太后、帝、共に泣き悲しまれ、天下の萬民、殆んど親戚を失つたやうな心地をした位の、大政治でもあり、大學者でもあり、又た、君子人でもあつ

つたのである。

司馬溫公は、又た、誠の人として、その名が高い。五六歳の頃、まだ熟さない胡桃を弄んでみると、姉がやつて来て、

「妾が皮を剥いて上げやう。」

所が剥けないので、放り出して立ち去る後へ、女中が来て、胡桃を湯へ浸け、綺麗に皮を剥き取つた。すると、姉が又々来て、

「誰れが剥いたの？」

「私だよ」と何氣なく答へた言葉が、圖らず父の耳へ入ると、父は、

「何故、嘘をいふか。」と叱りつけた。司馬溫公は、深く自分の非を悔ひ、爾後は決して嘘をいはず、修養の至る所、世にも稀なる誠の人になつたのであるとか。

司馬溫公は、嘗て晁無咎といふ人に語つて、

「自分には、何一つ、人に勝つた事はない。たゞ平生の行爲中、曾て人にいはれ

◎過つて  
改むに  
は改むに  
とるは  
とるは  
孔と

◎吾れ人

司馬溫公



に過ぎない  
もたのぎ  
たすい  
すむ  
平生未だ  
所人に對  
して大に  
べからず  
らるるの  
みらざる  
馬温公の  
司

ないやうなのがなはいばかりだ。」といった。

又た、劉安世といふ人が、

「たゞ一言で、一生涯の守りとなるものは何でせう？」と尋ねると、

「誠でせうよ。」と答へ、更に、従つて入る所を尋ねると、

「嘘をいはない所から入ります。」と答へた。安止は、聞いて、何でもない事やうに思つたが、甚はだ何でもなくない。爾後七年の間、努力に努力を重ねて、初めて言と行との一致を得たといふ。

言行一致は、眞實、難かしい。努めても、努めても、つひ、嘘が出る。況してや、努めず、戒めず、却つて、嘘を世渡りの一方便のやうに心得るに於てをやである。誠への道は、まだまだ遠い。

#### 4 羊番の小僧

平生、嘘ばかり吐いてゐると、稀に眞實の事をいつても、人は、それを信じて呉れない。それが爲めに、大に困る場合がある。

或る悪戯小僧、吩咐けられて、羊の番をしてゐたが、さて退屈で仕様がな

一番、畑の人たちを欺してやらうと、飛んだ考へを起して、

「狼だッ！ 狼だッ！」と呼んだ。百姓等は、

「それッ！」とばかり、手に手に、鍬や鋤や鎌などを提げて、大急ぎ、駈けつけ

たが、狼とは眞つ赤な嘘、小僧の奴が、

「やあい！ やあい！ 馬鹿やあい！」と、手を拍つて嘯し立てる始末に、

「畜生ッ、擔ぎやつたな！」面膨らして引き返した。

その翌日も、その又た翌日も、悪戯小僧は、同じやうに呼んで、同じやうに人を欺した。

◎ 虚言者

虚言者  
は眞實な  
語らるる  
ぜらるる  
ルスト  
トリア  
トリ

すると、一日、眞實に狼が襲つて來た。羊は、彼方、此方へ逃げ惑ふ。小僧







その後ち、夫が、用事あつて江州へ行くことになる、妻は、彼の十兩を取り出して、

「この金で、綿でも買つてお出なさい。得ですから。」斯ういつて、夫に渡した。夫は、それを持つて出かけが、大津の石場で、船に乗らうとして、過まつて湖水の中へ落してしまつた。

「これは、飛んだ事をした。」と、自分の不注意を悔ひるばかり、何とも仕方がない。歸つて妻に話すと、妻は、割合にさつぱりしてゐて、

「それも約束事でさあ。悔んだとて、取り返しのつくものぢやなし、身に負はない金だと思つて、まあ、諦めませうよ。」と澄してゐた。

すると、或る時、大津の魚商人が、大きな鯉を擔つて来て、

「立派な鯉でせう？ 何うです、買ひませんか。」と勧める。けれど、商家で買はうとしないので、魚商人が、空しく辭し去うらとする所へ、裏の寡婦がやつて來

◎佛の給人へはなれは  
ふに教へるに  
事執心  
かてれ  
長明

◎心を養ふは欲  
ふは欲  
きはなし  
孟子

「ぢや、妻が買はう。」と、持つて行つた。

そして、料理にかゝると、鯉の腹から、紙に包んだ十兩の金が出た。商家の落した話は、豫々、聞いてゐる。急ぎ、戻しに行くと、

「私は、前に湖へ落したのだから、これは、私の金ぢやありません。貴方の買つた鯉の腹から出た以上、當然、貴方のものでせうよ。」といつて、受け取らない。寡婦は、首を掉つて、

「否、そんなわけはあありません。」と、強ひて置いて戻ると、商家は、それを返しに来る。復た持つて行く。復た返しに来る。往き返り、數度に及んで、果ては、口論をおつ始めた。

その聲に、近所の人が驚き集まつて、種々、扱つて見たけれど、兩方共、固く執つて動かたない。已むなく官へ訴へた。官では、二人の正直を賞め、



●陰謀ありす  
●徳報不祥  
●馬鹿不祥  
●に勝り仁  
●除く百端  
●列女傳

「お前がたの事を、後の世へ傳へることにしやう。」と、その十兩の金で、當時、近所に住んだ細工の名人左り甚五郎に命じて、鯉を刻ませ、祇園の山車に飾りつけて、それを「鯉山」と名づけられた。  
二人の正直、何と驚いたものではないか。義、不義に關はらず、たいたい掻き込みたがる今の人は、恥づる所がなくてはなるまい。

### 6 門と驢馬

世間に多い小才子共は、正直者の事を、一概に「馬鹿正直」といつてしまふ。甚はだ不都合な話であるが、又た、眞に馬鹿正直とすべき者がないではない。或る男、父が羊を攘むと、早速、官へ訴へた。これなどは、馬鹿正直の甚はだしいもので、骨肉の非を掩ふのは、不正直でも何でも無い。却つてそれが正直なのである。

●君千は  
●諒ならす  
●孔

又た、昔しの俠客などは、一旦、人と約した事は、是でも、非でも、必らず仕果したものであるが、これ亦た、馬鹿正直の一つであらう。論語には、これを名けて、「匹夫匹婦の諒」としてある。非と氣がついたら、時には約束をも違へなければならぬ。

それから、こんなのがある。或る主人、旅に立つ時、「おいおい、俺の不在中は、特に氣をつけて、門を守るのだぞ。それから、驢馬と手綱にも注意してな……」と、僕に命じて置いた。

斯くて、主人が出かけた後ち、一夜、近所の方に音楽會があつた。音楽好きの僕は、聞きたくて仕様がなすが、主人の言葉もあり、行くことが出来ない。

「困つた。何とか工夫はないかなあ。」と、千思萬考の末に、一つの奇計を案出した。先づ、手綱で門を縛り、それを驢馬に負はせて、彼の家へ曳いて行つたのである。すると、その後へ、盗人が入つて、家財、諸道具、何一つ残さず持つて

●拙な考  
●休むに  
●似たり



○學柱に  
謀... 俚

行つてしまつた。

間もなく空屋同様の家へ歸つて來た主人は、驚き呆れて、嚴しく僕を責めた。僕は、一向平氣なもの、

『そんなに仰しやるな。私は、旦那のお言葉通りに、門と驢馬と手綱の三品を、確かに守つてゐたのですから、お叱りを受けるわけはありません。』といふ。主人は、益々腹を立て、

『汝に門を守らせたのは、盗人の入らない用心ぢやないか。馬鹿めッ。』と罵り、その僕を打ち据えたとのこと。

これも、正直ではあらう。主人の命令を、後生大事と守つたのであるから、正直には相違ないが、その正直が、目的を意識しない正直、盲滅法の正直である點に於て、到底、馬鹿正直たるを免れない。

### 第三 謙遜

#### 1 貝原益軒と楠公碑

不徳にも色々あるが、傲慢程、人に嫌はれるものはあるまい。如何に學問があり、如何に才智があり、如何に手腕があり、如何に技藝があつても、その人に、たつた一つ、傲慢といふ不徳がつき纏つてゐる以上、それ等すべての美點、長所も、忽ち光輝を失つてしまふ。

貝原益軒、名は篤信、通稱久兵衛、初め、損軒と號し、後ち、益軒と改めた。父は、黒田侯の御祐筆員原利貞、號を寛齋といつた人である。寛永七年十一月十四日、福岡城内に生れ、正徳四年八月二十七日、八十五歳で病歿した。益軒は、幼い頃から賢くて、六七歳の頃、まだ習はない假名を讀み、九歳、兄

◎最も  
なる品  
性も傲  
爲めは  
汚され  
終る...  
アク...  
ス...  
チ...



存齋から三體詩絶句を授けられて、能く了解した。長ずるに連れて、益す、學を好み、遂に一代の大學者となつた。「博學洽聞、海内比なし。」とは、太宰春臺が嘗て益軒を評した言葉である。漢學、國學、地理、歴史、本草、農學、醫術、衛生、一として通じないのはなかつたといへば、春臺のこの評、蓋し溢美ではない。それ程の學者でながら、益軒は、極めて謙遜にその身を持ち、平生、『自分はたゞ、恭しみ黙して、道を思ふばかりぢや、人に優つた點とてはない。』といつてゐた。

寛文四年、三十五歳、益軒は、京都の遊學を終つて、歸國する途中、兵庫へ立ち寄り、楠 正成の墓へ詣でた。當時は、まだ、碑も何も建てられてはゐない。折柄、春のことで、草茫茫たる田の中に、標の梅と松が二株、淋しく植ゑられてゐるばかり、實に荒涼たるものであつた。益軒は、打ち見て、感慨の涙に暮れ、低回顧望、殆んど去るに忍びなかつた。そして思つた、

◎程はす程  
程はす程  
程はす程  
程はす程

◎善は善  
善は善  
善は善  
善は善

◎自ら心善  
自ら心善  
自ら心善  
自ら心善

「今日既にこんな有様では、後世になつて、誰れも楠公の墓といふことを知らなくなるであらう。」と。こゝに建碑の考へを起した。

その夜泊つた兵庫の旅館、繪屋某といふのは、福岡藩の御用商人である。益軒が建碑の事を相談すると、

「いや、眞實でございます。是非、然うしたいもので……。」と一も二もなく賛成した。二人の間には、固い約束が結ばれた。

斯くして、益軒は、福岡へ歸つたが、つらつら思ひ直して見ると、楠公の事蹟は、區々たる楡楊を待つ迄もなく、既に世に明かである。且つ、公の盛徳、功業を述べて、これを石に勒するなどは、餘程、文學に長けた者でなければならぬ。第一微賤の身で、他藩の領内へ碑を建てるのは、到底、僭越の罪を免れないであらう、といふので、斷然、當初の志を棄て、その旨、繪屋へもいひ送つた。

現に存する「嗚呼忠臣楠子之墓」の碑は、後ち二十七年、元祿五年、水戸侯徳



◎あれど  
もなきが  
若くも  
れども  
しきど  
子しき  
……  
孔若

二

四二

川光圀の建てたものであるが、光圀と益軒との間には、多少、交通があつたといへば、光圀の彼の擧は、或ひは益軒の勸めに出たのかも知れない。

又た、こんな事があつた。或る時、これも歸國の海上で、同船の者五六人、互に姓名を問ひ合ふ間もなく、世間話しに日を重ぬる程に中に、一人の青年があつて、切りに經書けいしよの義を講じ、傍らに人なきが如き風であつた。益軒は、たゞ黙々として聞いてゐたが、やがて船が港へ着き、各自、郷里を明し、姓名を告げて、再會くわいを契ちぎる時、益軒も、

「手前は、福岡の貝原久兵衛と申す者でござる。」と名乗つた。すると、彼の青年は、大に耻ぢて、名も告げずに逃げ去つたといふ。

自らその人に非ずとして、楠正成の墓碑を建てることを思ひ止まつた益軒の謙遜は、今の賣名者流を戒しめるに足るであらう。船中、青年の愚説を容して一言も吐かなかつたそれは、左右、僅かの學問を鼻にかけたがる今の若者どもの、

よい手本ではあるまいか。

### 2 角のある馬

傲慢には、程度がない。學問なり、技藝なり、その他、何なり、彼なりが、幾分、人より優つてゐると、益々、それを大きく見て、然らでも高い鼻を一層高くし、自分を買ひ被り、その揚句には、分不相應、力量以上の事を思ひついて、我れと我が身を滅してしまふ。

或る馬、かなりのよい馬で、自分では、

「千里の馬とは、俺の事だ！」と思つてゐた。或る時、隣りの牛に向つて、

「お前の角を貸して呉れ。」突然、いひ出した。

「何にするのだ？」と、牛が訝かしげに尋ねると、

「他ぢやない。知つての通り、俺には、一日に千里の道を走る術があるけれど、

角のある馬

四三

◎人は皆  
金の銅  
を金と  
思ふ  
獨逸  
……  
俚諺



◎取らぬ  
の皮  
狸用  
……  
狸

悲しいかな、お前のやうな角がない爲めに、一生を賤しい馬で終らなきやならぬ。實以て残念の至り！ 俺に角があつたら、それこそ天下無敵の獸で、恐らく敵對ふものはあるまい。是非、角を借して呉れ。先づ、日本中の獸を切り従へ、それより、唐、天竺へ押し渡つて、獅子も、麒麟も、片つ端から配下につけ、普ねく天下に猛威を振ふのも、何の、お茶の子さいさいだ。俺が獸の大王になつた曉は、お前を引き舉げて、關白にしてやるよ。何うだ？ 角を借して呉れるか。それとも可厭かね？」と鼻息荒くいふ所は、最早や、獸王の位に登つた心得らしい。

牛は、例の落ちついた態度で、

「それは、善くない考がへだ。馬は馬、牛は牛らしくしてゐるこそ、その天命の得た所で、無事長久の計、この外にはない。足ることを知らず、法外の望みを起して、位が分限に違ふのは、身を滅ぼすの因だ。思ひ止まり給へ。悪いことはい

◎君子は  
ことごと  
思ふ  
……  
出で  
その位  
……  
會子

◎知らぬ  
の爪  
狸裂  
……  
狸

はないから。」と忠告したが、「馬の耳に念佛。」の解らう筈はなく、強ひて角を借り受けて、勢ひ猛に駆け出した。

斯くて、谷を涉り、山を越えて、廣い野へ出ると、そこには、大勢の人が働いてゐて、中の一人が、

「おやおや、珍らしい馬が來たぞ。角のある馬は、前代未聞ぢやないか。」といふと、一同、

「これは珍らしい、これは珍らしい。」と囁し立て、寄つて集つて引つ捕へて、見せ物小屋へ繋いでしまつた。斯くて、獸界の王になる望みの馬は、女、子供に迄辱しめられつゝ、あたら、一生を見せ物じまひにしまつたといふ。

馬の失敗は、その原因、些か他の群馬に優つてゐた爲めに、つひ、圖に乗つた事に在る。小人は、得て圖に乗り易い。善く泳ぐ者の却つて水に溺れる道理を知つて、學問、技藝のある者は、特に謙徳を守るべく注意しなければならぬ。



◎頭は稔る程  
稲穂は低き程  
古句かな

### 3 中江藤樹師たるを好まず

學問を鼻にかけたり、技藝を見せびらかしたりしたがるのは、生物識りの事である。至つた人は、却つて自ら至らない者として、謙遜に謙遜にと心がける。

中江藤樹、諱は原、字は惟命、通稱を與右衛門といひ、近江の西高島郡小川村の人である。藤の木の下に生れ、後ち、學を藤の木の下で講じた所から、門人等は、呼ぶに藤樹先生を以てした。

僻地にこそ生れたれ、藤樹は、幼時から、少しも野郎の風に染まなかつた。九歳の時、伯耆の太守加藤侯の士で、祖父に當る吉長が、

『俺の世嗣にするから……』

と、請うて伯耆へ伴れて行つた。吉長は、字が拙で、平生、悔む場合が多かつた。で、その子に字を習はせて見ると、その書の見事さ、人も驚くばかりであつ

た。十歳の時、加藤侯が封を伊豫の國大洲へ移すと、藤樹も、吉長と共に、それへ轉住した。十三歳の時、祖父が賊を討つと、藤樹は、少しも恐るゝ氣色なく、祖父の命を受けて、その賊を捕へやうとした。賢い子供であつたばかりでなく、又た、氣象の雄々しい、健氣な子供であつたのである。心がけも、人と違つて、一物の遺受も、甚はだ慎しみ、羞惡の心深く、一食を食べるにも、君父の恩を思ふ、といふ風であつた。

十七歳の時、京都から禪僧が来て、論語の講義をした。加藤家の士風は、只管武を尙んで、學問の事を一概に文弱と貶し、誰れ一人、聞く者のなかつた中に、藤樹のみは、怠らず聴受した。藤樹が聖人の學に接したのは、この時を以て初めとする。然るに、僧去つて、復た師とすべき人がない。乃で、四書大全三十六卷を購ひ、毎夜深更、二十枚と定めて熟讀した。人の誹りを憚らつて、晝間は、何氣なき體に諸士と應接し、書を見るに及ばなかつたのである。

◎大衆に在りて  
衆居し離りて  
ソニエマ  
群と間は







◎人の好悪  
ひは人の好  
で人の好  
となるに  
孟子

池田新太郎少將光政の臣熊澤蕃山は、近江の國桐原村へ退いて、専ら經學を攻め、苦學數年、略ぼ大義に通じたけれど、尙ほ良師に就いて、道を聞かうの志切なる折柄、京都の一族館で、泊り合せた男から、藤樹の名を耳にすると、その學徳を想望するの餘り、早速、小川村へ訪ねて往つて、その志を告げ、  
『何卒、門人の列にお加へ下さるやう。』と懇願した。蕃山、二十三四歳の頃の事か。所が藤樹は、  
『否、私は、學も薄く、徳も低い者で、人の師になるなどは、思ひ寄らぬことにござる。』といつて、斷然、その請ひを斥けた。  
斥けられたに就けて、蕃山は、益々、藤樹の學徳の尋常ならぬことを知つた。それを知つては、空しく辭し去るに忍びない。請ひ請ひて、門前に佇むこと正に二晝夜、許しの出るのを待つた。  
藤樹の母は、それを見ると、つひ、氣の毒になつて、藤樹に告げた、

◎この機に  
よくと機に  
父母の機に  
心任せて  
人聞き事へ  
歌人

『態々、遠方から尋ねて来て、あれ程、懇ろなお頼みぢや。その人に、習つた事を傳へたとて、好んで人の師となる。』の誘りはあるまい。曲げて、お頼みを聽いて上げさつしやれ。』この言葉に、藤樹も、今は辭みかねて、蕃山を呼び入れ、知る所を盡して、これに授けた。蕃山は、お蔭で、陽明學の大家となることが出来た。  
二晝夜を通して、藤樹の門前に佇み、請うて已まなかつた蕃山の熱心、蕃山の篤學は、今の輕薄才子を戒しめるに足るであらう。藤樹の謙遜に至つては、これ凡人の及ぶ所ではない。而も、學問、技藝の至つた者は、すべて然うである。鼻にかけたり、高ぶつたり、己惚れたりするのは、到底、生物識りの事である。

4 子殺し豫言者

世には、無闇に自分の事を吹聴する者がある。その言葉は、多岐に亘るが、結







5 伊藤仁齋の井戸浚へ

◎あれど  
もなくど  
若くもど  
しきもど  
しきもど  
子しきもど  
孔若ど

小人程、威儀を繕ひ、容體ぶり、強ひて威嚴を保たうとする。さては、美服を飾り、金時計をぶら提げて、無學の癖に、學者顔をし、貧乏人でゐながら、金持ち面をし、人に頭一つ下げるにも、左顧右盼、誰れも見てゐはしないかと、何かそれが自分の威嚴に關する事のやうに心配する。平々凡々たる小人に、威嚴の心配があるものではない。眞の威嚴は、却つて謙遜の間から發する。人を眼下に見下せば、人も眼下に見下して、あたら、高慢の鼻をへし折られなければならぬ。伊藤仁齋の事は、前にも記した。この人、極めて謙遜な人で、身は、佛教嫌ひの儒者でゐながら、或る時、或る寺院を過ぎるのに、堂下に立つて、慇懃に禮拜し、お供の門人等が咎めると、  
「人の地所を通つて、その主に挨拶せぬ法はあるまい。」と答へた。

◎郷に入  
れば郷  
に従ふ  
に倣ふ  
に倣ふ

毎年、節分の夜に豆を撒いて、  
「福は内！ 鬼は外！」と怒鳴り立てる。所謂る追儼なるもので、昔は禁中行事の一つとして行はれ、今に至つて、我が國一般の風俗である。理屈をいへば、無論、一個の兒戯に過ぎない。生物識りの手合は、  
「詰らない。迷信ぢやないか。」といつて、一概に貶してしまふが、謙遜なる仁齋は、故さら、他と異なることを好まず、自ら上下をつけ、三寶を捧げて、豆を蒔く所、世間並の好々人であつた。  
孔子がやはりそれで、論語に、「郷人の讎には、朝服して阼階に立つ。」と見え  
てゐる。  
中にも、小人を驚かすべき一事は、仁齋の家のつひ近所に、一つの共同井戸があつた。或る時、使用者一同、力を協せて井戸浚へをしやうとすると、仁齋は、このこ出て来て、手傳はうとする。一同、恐縮がつて、



⑥ 賈くしき  
に下れば  
衆惡ま  
外傳 韓詩

講 選

五六

『手は、私共で充分です。何卒、お引き取り下さい。』といふのを、  
『否々、私も、この井戸を使つてゐる。皆の衆ばかりに骨折らせる法はない。私  
も手傳ひますよ。』斯ういつて、終日、その勢を分つた。  
高ぶり屋に、この真似が出来るか、否か。こんな場合、多少、金を持つた者な  
どは、代人でも出して、自分は、失敬してしまふ。威嚴に關する、と然う思ふの  
であるが、前いふ通り、威嚴は、却つて謙遜の間から生じて來るので、或る所司  
代は、途中で仁齋に出逢ふと、公卿の位の高い人と思つて、下馬したといふ逸話  
がある。公卿の人たちも、  
『仁齋先生は、大納言以上の品格を備へてござる。』と評し合つたとか。

## 6 牡牛と蛙

何人も、自分の價値を内輪に見積つて置けば、間違ひはないのであるが、左右

⑥ 滿は損  
を招き  
は益を  
經くは  
益を受  
書

外輪に見積るから困る。即ち、自分を買ひ買ひ被つて、果ては法外の望みを起  
し、我れと我が身を害ひ破る。所謂、「滿は損を招く」もの。  
或る池に、親子五六匹の蛙が棲んでゐた。一日、遊びに出てゐた子蛙が、遽た  
いしく馳せ戻つて、  
『お母さん、彼處に、何か知ら、大きなものがゐますよ。』といふ。平生、自ら大  
きいことを誇りとしてゐた親蛙は、子蛙のいふ「大きい」の一言が氣になつて、  
『大きいつて、俺よりも大きいか。』  
『大きいですとも！ 餘つ程大きい。』  
『何れ何れ？』と出て見ると、牡牛が一匹、草を喰つてゐる。心中、成程、大き  
いとは思ひながら、例の高慢から、うんと腹を膨らまして、  
『何うだ、これでも俺より大きいか。』  
子蛙等は、口を揃へて、



○傲慢に  
次ぐは滅  
亡なり  
聖書

「な、な、な、な、な！」

「これでもか。」

「な、な、な、な、な！」

「これでもか。」と、一生懸命、腹を膨らませると、ばちんの聲諸共、引き裂けてしまつた。

自分を買ひ被る者には、往々、この種の失敗がある。高慢病者は、この所、大に戒心すべきである。

○山中の  
賊に破り  
易くは破  
り王陽明  
破中

### 第四 克己

#### 1 豊臣秀吉侮辱を忍ぶ

その人自身、やがて、その人の敵である、人の敵は、人の心中に在つて棲む。何んな敵か。佛教では、その大なるもの三つ、貪、瞋、痴、即ち、慾と怒りと愚痴とを擧げて、これを三毒と呼び做す。人は、克己の力によつて、この三毒、三敵を攻め殺さなければならぬ。この事たる、談、甚はだ容易ではない。如何せん、この容易なる仕事を遂行するのてなければ、世に處して、身の安全を保ずることは出来ないのである。

豊臣秀吉は、我が儘一偏の一國者、腹立つばい人とはかり思はれてゐる。秀吉には、成程、然ういふ傾きがあつたらしい。が、それと同時に、克己、忍耐の力



◎無禮極は  
傲にをし  
度人間を  
人問を  
蔑する  
より起る  
なり起る  
マナンメル

克 己

六〇

も、人一倍であつた。然ればこそ、人一倍の大事業を成し得たのである。

「太閤記」に、こんな話が見える。權六郎はち後の柴田勝家は、枕を執つて、ごろり、横になると、當時、木下藤吉郎といつてゐた秀吉に向つて、

「貴公は、萬事に器用ぢやげな。按摩は何うぢや？」といふ。随分、無禮な言分ながら、藤吉郎は、可厭な顔もせず、

「器用といふ程ではござりませぬが、真似ばかりはいたします。では、お腰を揉ませて頂きます。」と、徐ろに側へ寄つて、權六の腰から股の邊りへかけ、揉み下げ、揉み下げした。

權六は、心地よげに頷づいて、

「うむ、なかなかの手際ぢやが、悲しいかな、小兵者の貴公、武士の業には些と不足ぢや。けれど、人の望みは、側からは測られぬ。何が望みぢや。貴公の所望を聞かせよや。」からかひ半分にいふと、藤吉郎、

◎封生きた  
すんばら  
しんばら  
王たる  
井白石  
新へ

「別に所望とはござりませぬ。たゞ、貴方がたのやうな大名衆に、手前のこの足を洗はせたいと存じますので……」と大きく答へたとのことである。

これは、秀吉がまだ微賤の身でゐた頃の話。その後ち、播磨、美作、備前、丹波四個國を領し、堂々たる諸侯に列して、而も逆臣明智光秀を滅ぼしてから、勝家は、昔をいひ出しては、秀吉を侮り、耻辱を與へた。そして秀吉は、それに對してよく忍び、己れに克つて、堪へられない怒りを制した。

同じく「太閤記」に、勝家は、左右、秀吉に遺恨已み難く、或る時、諸將の集まつた席上で、

「我々は、故殿の御恩を受けて、今日、國持ちの列に加はつてをるが、これといふもの、我々一個の武功のみによるのではなく、一つは、先祖が御奉公申し上げた、その餘澤でござる。然るに、筑前守殿は、御一身の働きで、お馬の口取り、草履取り、お茶坊主、お賄方と次第に立身なされ、今は、中國の探頭職と迄歴

◎天下の  
も然るに  
卒然  
に驚かす  
なかく  
怒ら加へ  
蘇東坡

豊臣秀吉

六一



◎唯頼子  
の信  
一すの  
は予の  
友は予  
リハ予  
スナ

昇られた事、稀代の御出世でござる。察するに、御勤勞ばかりではござるまい。何か御信仰の神、佛でもおありなのか、但しは、然るべき内緒のお引立による事か、承はりたく存する。』斯んなことをいひ出した。すると秀吉は、

『御不審、御道理ながら、秀吉がこれ迄になつた初めを申せば、柴田殿の御推舉で、昔し、木下藤吉郎と稱へ、お足輕を勤めた頃は、時々お館へ参りましたが、他に、内縁の引立もなければ、信仰の神、佛もござらぬ。』といひ切つた。

勝家は、俄かに顔を澁めて、

『あゝ、痛いッ。これは堪らぬ、堪らぬ。この程の辛勞で、肩が凝つたものに見える。あゝ、昔しの藤吉郎なら、按摩を取つて貰ふのぢやに……』といふ。秀吉は、勝家の後ろへ廻つて、

『親にも等しい柴田殿でござる。さあ、按摩して進ませませう。』と、肩から兩腕へかけて、そろそろと揉み解した。勝家も、流石に意外のことである。何といふべ

◎て支一  
忍以百  
一以百  
支以百  
て忍以  
支以百  
て忍以

◎世の中

き言葉もなく、たゞ首を低れてゐた。

が、何とか秀吉を怒らせたものと、

『さてさて、筑前守殿は、昔よりも、按摩が上手になられた。お蔭で、肩の凝りは和らいだ。この上は、腰を揉んで貰ひたいものぢや。』といふ言葉の下から、

『お易い御用!』とばかり、秀吉は、復も腰を揉み出した。傲慢不遜の勝家も、今はせんやうなくて、うとうとと、空寝入りしてゐたとか。

秀吉の克己心、何と驚いたものではないか。怒り易い一面には、又た斯うした所があつたのである。英雄、偉人を學ぶ者は、赫々たる功業に眩目せず、能くその功業のあつた所以の理を考へなければならぬ。

## 2 姑耶山の狐

狐は、畏にかゝつて、命を失ふ。人も、往々、畏にかゝる。金の畏、名の畏、



に怖きは  
金と名は  
色と名は  
方と名は  
魅と名は  
古歌

克 己

六四

色の畏が、到る處にかけられてゐて、智慧に誇り、自ら萬物の長と號する人が、かたり、ころりとそれにかゝる。畏と知らずにかゝるのではない。畏と知つて、而も、その畏にかゝる。畢竟、慾があるからである。金の慾があるから、金の畏にかゝる。名の欲があるから、名の畏にかゝる。色の慾があるから、色の畏にかゝる。

昔し、姑耶山の片蔭に、形ばかりの庵を結んで、宵々毎に講談をする翁があつた。一夜、講談も既に終り、まだ寝ぬ人を空に知る砧の聲も幽かに、月、山の端に傾いて、いとゞ小暗い庭の木の下に、人が眠つてゐる様子。近寄つて見ると、白髪の老人である。

「どこから來られた？」尋ねると、

「翁の御講談のあり難さに、毎夜、密かにこれへ參つて、聴聞いたしまする。」

「何故、内へは入られぬ。明晩も來られるのなら、席を設けて置きますぞ。」とい

◎屏あり

遠方より  
來る亦た  
悦ばし  
らすや  
孔子

へば、老人は、顔も得難げす、頓首して、

「明晩は、最早や、參りますまい。手前の命も、今宵限りでござる。」といふ。

翁は、驚いて、

「して、その理由は？」

「他ではござらぬ。手前事、元と人間ではなく、この山の畔りに棲んで、既に數百年を経た老狐でござるが、今日、畏をかけられ申した。畏をかけられた上は、縦し、一夜を事なく過すとも、明晩は、必らずかゝるでござりませう。」と愁はしげにいふのである。

この言葉、翁には腑に落ちかねる。

「畏と知らずにかゝるものは、是非ないことぢやが、畏と知つて畏にかゝるとは、一體、何うしたといふのぢや？」と問へば、老人は、

「それが畜生の淺猿しさで……」とばかり、泣く泣く姿を隠したといふ。

◎墨とい

姑耶山の狐

六五



は知りまつ  
川の流る  
に身を沈  
め古歌

◎慾の釣  
針にかゝ  
るに  
慥に  
慥に

然し、不思議でも何でもない。畏と知つて畏にかゝるのは、人間がやはりそれ  
で、どこかに馬鹿な男があつた。或る兩替店に、數多、金銀の取り散してあるの  
を見ると、飛び込みざま、その一掴みを取つて、逃げやうとする。店の者が立ち  
かゝつて、

「汝れッ！」とばかり引つ捕へて、

「亂心か、發狂か。店にゐる大勢のこの人が判らぬか。さてさて、間拔けた盗人  
ではある。」と突き放すと、男は、本意なげに手を摩り摩り、

「私は、根からの盗人ではござりませぬ。盗まうの下心があつたわけではありま  
せぬが、今日、五兩の金がなければ、後へも、先へも、行かれぬ事のある折柄、  
此方のお店の金を見ますると、傍のお人の姿も見えず、晝と夜との氣もつかず、  
金に心を奪はれて、面目もないこの始末。眞つ平、御免下されませ！」と、赤恥  
擡いて立ち去つたとの話。素より話に過ぎないが、心に慾がある以上、金の畏に

も、名の畏にも、色の畏にもかゝるであらう。戒しむべきは慾である。克己し、  
自制し、慾の跳梁を妨げること、これ、處世の第一要義でなければならぬ。

### 3 本多正信の名言

諺に、「人の慾には限りがない。」といふ。彼の有名なる歴山大王は、當時、知  
られてゐた國といふ國を征服し盡し、最後に、馬を印度河の畔りに進めて、從者  
から、そこを世界の涯と聞くと、

「あゝ、朕の征伐を待つ國は、最早や、他にはないのか。」といつて泣いたとのこ  
とである。これ、人の慾に限りのないことを實證したもので、大王の心持ちは、  
やがて、萬人の心持ちである。今も、昔も、慾に驅られて、我れと我が破滅を求  
める者の絶えないのは、これが爲めたるに外ならぬ。克己以て、適度に慾を制す  
るのが、最も賢明なる處世法であらう。

◎人の慾  
には限り  
がない  
に慥に  
慥に

◎腹八分  
目撃者要  
ら慥に  
慥に







覆へるは  
後車の誠  
：めなり  
買誼

◎徐ろに  
急洋俚諺

克 己  
いであらう。戒心を要する。

七〇

#### 4 黄金の卵

慾心の勝つた人は、左右、事を焦り過ぎる。手取り早く、その慾心を充さうとする。爲めに、得らるべきものも得られず、元も子も臺なしにして、  
『え、馬鹿を見た。』と、残念がる場合が多い。慾心は、氣を長くして、徐ろにこれを充たすのでなければならぬ。こゝにも克己の必要があるのである。  
或る農夫、一羽の鷺鳥を飼つてゐた。それは、實に不思議な鷺鳥で、毎日一個づつ、黄金の卵を産む。あり難いわけであるが、農夫は、例の慾心から、事を速くしやうとして、

『この鷺鳥を殺して、腹の中を検べたら、大した物があるに相違ない。一躍して世界第一の大金持ちにもなれるだらう。』といふと、早速、鷺鳥の頸を締めた。何

を生む  
ソツ

ぞ知らん、腹の中は、普通の鷺鳥と同じことだつたので、農夫は、いたく失望した。

じつと待つてさへれば、鷺鳥が卵を産む限り、その卵は、永久に亘つて農夫のものである。焦つたばかりに、充さうとする慾心も充されず、折角の實を失くするなどは、事が餘りに馬鹿げてゐる。制慾なるかな、克己なるかな。

#### 5 白隠禪師怒らず

己れに克つには、努力が要る。而も、努力の要る中は、まだまだ、本眞ものではない。何故ならば、一旦、その努力が弛めば、怒りや慾が、再び頭を擡げて來るから。即ち、己れに克ち抜くのでなければならぬ。いひ換ふれば、怒りや慾の根元を切つてしまふのでなければならぬ。斯うなれば、特に努力を費さなくとも、一年三百六十五日、己れに克ち通してゐられる。西郷南州の所謂、命も要

◎命も要  
らす名も  
要らす金  
も官位も  
要らす人  
は始末に  
困る

白隠禪師

七一



開：かは俗き新然ゆし大し難ら困のな  
四ら見の人くれな得業國なでる始り、  
郷する眼はのどりらな家共は人末、  
南：べに凡如も、れ成のに艱なにこ

らす、名も要らず、金も官位も要らぬ人」とは、この人のことであらう。  
昔し、白隠禪師といふ高僧があつた。俗姓は杉山氏、貞享二年、駿河の國浮島  
原に生れた。初め、單嶺和尚の得度を受け、後ち、美濃に遊んで、瑞雲の馬翁に  
事ふること暫く、去つて越後の英巖寺に往き、性徹和尚の人天眼目會に參じた。  
一夜、鐘聲を聞いて、悟る所があつたが、和尚は、  
「機鋒が鈍い。」といつて允さない。よつて、宗格禪人といふに勧められて、共  
々、信州飯山の正受老人に參じた。老人は、手段最も辛辣を極めたけれど、露、  
屈しないで工夫し、終に豁然として大悟した。寂したは明和五年十二月十一日。  
壽八十四。禪師の「夜船閑話」は、今日流行る腹式呼吸法の權輿といふことに  
なつてゐる。

禪師は、曠世の老知識、稀代の超悟僧で、その言動には、凡人の解し得ないや  
うなのが多々あつた。取り別けて著るしい一事は、駿州原町の某寺を管してゐた

頃、寺の門前の一商家の娘が、若氣の誤まり、何者かの胤を宿して、男の子を産  
んだ。物堅い父親は、娘を責めて、

「相手は誰れぢや？ いへ、いへ。いはなきや、家には置かないぞ。」と、嚴しい  
折檻に、娘は、到頭、白狀した、

「實は、和尚様に口説かれて……」といふのである。  
その商人は、豫々、禪師に歸依して、永い間、供養をして來た。従つて、立腹

も亦た一段、赤子を抱いて、寺へ往つて、  
「和尚さん、貴方は、ひどい人です。多年の義理を忘れて、人の娘を疵物になす  
つた。實にひどい。罪の塊まりは、確かにお渡ししますぞ」と、禪師の前へ突き

出した。禪師は、  
「あ、然うか。」とばかり、膝へ抱き取つて、  
「お、可愛い子ぢや。」とばかり、一言の辯解もせぬ。商人は、益々、怒つて、

◎我れをばな  
牛と我れをばな  
牛と我れをばな











戯むる  
る甘んず  
るなりす  
枚架

ければならぬ。危ふし、危ふし。

既に危機一髪といふ時、折柄、法王座に入三昧中の釋迦は、例の神通力によつて、遙かにそれと感知し、阿難の食事を遮つた。

長者の企みは、がらり外れた。娘は、最早や半狂亂である。阿難の袖を執り、膝に跪つて、泣きつ、喚きつ、掻き口説いた。けれど、阿難の淡然として動かぬのに氣を焦し、今度は、釋迦に泣きついた。釋迦は、人生の儚ないことから説き起して、戀の詰らなさに及んで、娘の心を翻へさせやうとしたが、娘は、

「否々、妾は、阿難さんの目を愛します。耳を愛します。鼻を愛します。口を愛します。手を愛します。身を愛します。阿難のすべてを愛します。然ればこそ、阿難さんを戀ひするので。」と殆んど手がつけられない。

これが普通の者ならば、呆れて、嗤つて、手を引いたであらう。けれど、慈悲を生命とする釋迦の爲めには、迷ひの凡夫程いぢらしい。種々の方便やら譬喩や

◎戀は言  
西洋俚諺

◎酒と女  
は苦痛の  
原因なり  
シャル  
マル

らを設けて、やつと娘に納得させたとのことである。

これは、一場の寓話に過ぎないであらう。而も、恩愛の絆の断ち難いことは、往々、斯くの如きものがある。阿難は、釋迦の神通力のお蔭で、思はぬ女難を免れた。長者の娘も、釋迦のお蔭で、断ち難いものを断つた。今の世には、大聖釋迦はゐない。人は、たい、各自の克己心によつて、女色の捕虜になることを免れるの外はないのである。







忠直も、氣色を變へた。壹岐は、委細頓着なく、

「承はりまするに、家中の者共、お鷹狩のお供をいたしまする時には、殿の遊ばされる事に常のないのを心配して、往々、妻子に遺言して出かけるとのこと。畢竟、君臣の情が離れ離れになつてをりまするので、斯くては、萬一の場合にも、誰れ一人、心底、御用をいたす者はあるまいかと存じまする。それを思へば、慶ぶべきではなく、却つて、歎かほしい次第でござりまする。」遠慮にいつて除けた。忠直は、きつと壹岐を睨めつけて、怒りに堪へない様子である。と見た近習の某は、目顔、手つきで、壹岐を退かせやうとした。壹岐は、

「子供の癖に、お前なんぞの知つたことぢやない。」と叱りつけ、直ちに刀を脱して、背ろへ押しやり、座を進めて、忠直の直ぐ前に平伏して、

「何卒、御存分に遊ばされよ。私は、生きてお家の衰微を見るに忍びませぬ。」決心、面に見はれていつた。忠直は、何一語もなく、佛然として奥へ入つた。

◎命に逆  
うて君を  
利す忠直  
を忠直  
とれを忠直  
説い忠直  
死忠直  
死忠直

◎死を畏  
れては長  
死を畏  
は長  
死を畏  
は長  
死を畏  
は長

◎故に夫  
の使者を  
悪む  
孔子

◎この波  
のあきにも  
このあきにも  
このあきにも  
このあきにも

後で、他の家老等が、

「お諫め申すには、自らその時がある。今日は何ういふ日ぢや？ 何もあんな不吉なことをいひ出すには當るまい。」たしなめ顔にいふと、壹岐は答へて、

「時とは如何？ 今日こそ、正にその時ぢやないか。殿のお顔の色を伺つてばかりわた日には、お諫め申す時はない。拙者は、元と、新參の者で、貴殿等のやうな世祿の臣とは違ふ。一命を捨てるのは、拙者の本分とする所ぢや。」といひ返して置いて、その儘、自分の屋敷へ歸つた。

そして妻にいひ聞かせた、

「奮をいへば、其方は足輕の妻ぢや。今日、立派なお家様として、多くの女共に侍づかれてゐるのは、皆これ、殿の御恩といふもの、決して忘れてはならぬ。今晚にも、俺へ切腹の御沙汰があつても、露、お怨み申してはならぬぞ。」  
悲しい夫の言葉に、妻は、たい、泣きに泣く。



◎直徳の  
功は一番  
権に勝る  
家康に  
川

風 書

八四

折柄、剣喙の聲が聞えた。壹岐は、厥然として立ち上り、  
「それッ、君命ぢや。」といふと、急ぎ登城した。

すると、忠直が待つてゐて、壹岐を寢室へ呼び入れ、  
「召したのは餘の儀ぢやない。晝間、其方の申した言葉を考へて、予は、寢て  
寝られぬのぢや。予が悪かつた、予が悪かつた。予は、其方の志を過分に思ふ  
ぞ。」といつて、手から一口の刀を興へた。

當時の識者は、

「侯の猛暴を以てして、無禮な壹岐を誅せず、却つて自分の過ちを謝し、壹岐  
を賞せられた所は、實に東照公の孫たるに愧ぢぬ。」

と評し合つたとのことである。

まこと、壹岐の忠誠、壹岐の剛直、壹岐の直諫は、家康の所謂、功、一番槍  
に勝るものであるが、その諫めによつて、直ちに自ら反省し、これを悔い、これ

◎我が善  
に人の  
善しき  
あるもの  
か、人の  
悪しき  
我が善し  
きなり  
古歌

を改めた忠直の態度は、この人として、特にあり難く思はれる。君臣一雙、千古  
の美談とするに足らう。

## 2 鏡の影法師

何人にも身最員がある。身最員がある所から、人と物争ひをした時など、自ら  
是とし善として、たゞたい、相手をばかり咎める。虚心平氣になつて反省せよ。  
罪の却つて自分に在ることを發見するであらう。

これに就いて、可笑しい話がある。昔し鏡を知らない國の人が、都へ上つて、  
ふと、鏡屋の前を通りかゝると、何やら光る物がある。不思議さうに覗いてみた  
が、俄かに大聲を揚げて、

「やれ父さん、お懐かしい。」といふと、彼の鏡を取りにかゝつた。  
亭主はびつくり、

鏡の影法師

八五



◎その父母も  
なり我が母  
れを愛せし  
敬せよ  
古歌

「何するのぢや？」

「何もしませぬ。これは、俺の父さんでござる。」

「飛んでもないこと、それは、賣物ぢや。」

「賣物？ 賣物なら買ひませう。」と、代金を拂つて、宿へ持ち帰り、さて物をい

つて見ても、返辭がない。

「は、あ、娑婆と冥途の隔てがあるので、お聲が聞えぬものと見える。何にもせ

よ、死別れて三年目、お目にかゝるといふは、あり難いことぢや。」と、鏡の中の

影法師を我が姿とも知らずに喜んでゐる。この男、顔形が父親そっくりだつたの

である。

故郷へ歸ると、鏡を荷物の中から取り出し、二階の長持へ隠して置いて、出入

毎に打ち眺め、懐かしがつてゐたが、或る時、女房が二階へ上つて、長持ちを開

けると、何やらきらきらと光る物！ 取り出して見て驚いた。二十五六の女がゐ

るのである。二階から飛んで降り、亭主の胸ぐらを取つて、

「お前はな、お前はな……」と泣くやら、喚くやら、こゝに嫉妬喧嘩がおつ始ま

つた。

すると、やつさもつさを聞きつけた隣りの妙琳が、

「まあまあ……」と割つて入り、二人を宥めにかゝる。愈々、喧嘩に花が咲く。

妙琳は、持て餘して、

「お前さんは、父さんぢやといはつしやる。内儀さんは、二十五六の女ぢやとい

ふ。何方が眞實なのか、妾が見て來ませう。」と、二階へ上つて、一目見て、これ

もびつくり、大聲揚げて、

「見なされ、お前がたが悋氣喧嘩をするぢやによつて、氣の毒や、二階の女中が

尼になれたわ。」と呼んだとか。

妙琳も、女房も、亭主も、それぞれ、鏡に映る自分の姿を見て、父ぢや、女ぢ

◎嫁なれ  
去るなれ  
ば  
小學

◎善し映る  
鏡の映し  
師の法  
よく見よ  
ば我が姿  
古歌



や、尼になつたと、大騒ぎをしたのであるが、彼の相手をもみ悪いとする者は、その實、自分の罪を見てゐるので、三人を距る、甚はだ遠くはない。

### 3 結城秀康と舞妓お國

苟くもこの心を修養して、人らしい人にならうとする誠意のある者の爲には、世上の事々物々、一として反省の種ならぬはない。結城少將秀康は、女歌舞伎お國の藝を見ると、自分の臍甲斐なさを省みて、思はず泣いたといふではないか。お國といふは、元と、出雲大社の鍛冶中村三右衛門の娘で、お國亦た、同社の巫女であつたといふ。それが、勸進の爲めか、他の理由によつてか、永祿中、京都へ出て来て、や、子踊と稱する一種の念佛踊を演じ、時の將軍義輝からも、一再ならずお召しを受けた。する中に、お國は、山名山三郎と情交を結んだ。山三郎は、初め、美色を以て蒲生氏郷に抱へられ、而も、武技にも長じたと見へて、

◎三人行  
へば我が  
師なり  
孔子

◎槍師々  
々は多  
れど山  
山三郎  
の槍は  
俗話

◎小技と  
雖も亦た  
忍耐と工  
夫とを要  
す  
マイル  
ス

年十五、名主城攻撃には、好き首一つ討ち取つて、一時、勇名を遠近に馳せた。氏郷の没落するに及び、その遺財を得て京都へ歸ると、公家、武家の女などを相手に、ひたすら、風流韻事に耽つた。彼の淀君も、これに通じて、秀頼を生んだと傳へられてゐる。さては、當時、技藝を以て世に鳴つたお國も、その藥籠中の物となつたのであらう。慶長初年の事か。但し、お國は、決して美人ではなかつたといふ。山三郎は、お國に教ふるに流行歌を以てし、又た、自曲を與へ、その扮装をも改めさせて、その踊に歌舞伎といふ名を命じた。實に、女歌舞伎の濫觴で、又た、我が國に演劇のある最初である。さて徳川家康の子、二代將軍秀忠の弟結城秀康も、山城の國伏見に在つて、一日、お國を召した。時にお國は、頸に水晶の念珠をかけてゐたが、秀康は、『不似合ぢや。これがよい。』といつて、珊瑚の念珠を與へた。既にして、お國は、進んでその技を演じた。羅衣、風に從ひ、長袖、交も横は































### 第六 言語

#### I 本多重次の直言

◎簡略とは肝要を略すを略す義なり  
無用を略す義なり  
川丸  
如丸

人の生活は、宜しく簡單、簡易にあるべきである。衣、食、住も、簡易なのがよい。禮儀も、簡易なのがよい。朋友との交はりも、簡易なのがよい。心づかひも、簡易なのがよい。言語、最も簡易なのがよい。所謂簡易生活は、當然、言語に迄及ばなければならぬ。簡易は、即ち、簡略である。簡略の「簡」は、えらぶと訓む。事の肝要を擇んで、無用を略すること、これを簡略といひ、又た、簡易といふ。人の生活は、この簡易なのをよしとする。

本多作左衛門重次は、爲人の粗豪太簡な、俗にいふ、大竹を割つたやうな男であつた。家康は、そのまだ三河に在つた頃、これを擡んで奉行に用ひ、高力、

◎我れ者なを  
知るれば我れ  
老しば我れ  
子

天野等の人々と、國政に當らせることにした。家中の人々は、平生、重次の一言一行が、餘りにおほまかなことから考へて、

『今度、作左を奉行になされたのは、殿様のお眼鏡違ひぢや。あの男が、何、人の上に立つ器なものか。』と誹つたが、事實は反對、一切、繁文褥禮を廢して、法三章的の政治を行ひ、情實にも利害にも頓着しないで、どンドン、事を取り裁いて行つたので、國內は、大いに治まつた。諺に所謂る、「人は見かけに寄らぬもの」である。

天正十八年二月、家康は、豊臣秀吉の小田原征伐に従ふ爲めに、當時の居城濱松を發して、駿河の長窪に軍した。三月、秀吉は、岡崎へ來た。重次は、時に岡崎に留守してゐたが、出迎へやうともせず、秀吉がこれを召すと、

『俺の主人でも何でも無い。お目見えには及ぶまいて。』といつて、斷じてその召しに應じなかつた。心の使ひ方が、直截簡明、極めて簡易であつたのである。



◎本術故  
身を誤り  
ると心得  
て、心厚  
何事も  
く慎しめ  
諸庵手  
島め

◎柴村は

辰 倉

一〇四

「誰だ? お、いい。喧ましいぢやないか。誰れだい? 熊はこゝにゐるよ。」

「どこだどこだ?」

「こゝだよ。そりや隣りの家ぢやないか。」

「お、然うか。失敗々々!」飛び出して、復たがらり、

「成程、こゝがお前の家だな。」

「隣家へ飛び込むなんて、そゝつかしいにも程があらあ。」

「へ、ッ、俺の口眞似をしてやがる。そゝつかしいのは其方のこつた。自分の死骸を置き忘れて来るなんて、餘まりぢやない。」

「死骸? すると、俺は、死んだのかね。」目を向る。八公は、せゝら笑つて、

「死んだのかもないもんだ。つひこの先の豆腐屋の前に、行き倒れになつてゐるぢやないか。」

「道理こそ! 昨日、ブランを飲み過してから、何だか體の工合が變だが、道理

己れを忘  
る……孔  
子

◎放心求  
れども知  
むるを  
孟子

こそ、道理こそ!」としよげ返る。

「だから、安酒は止せといつたんだ。今となつちや仕方がない。一時も早く、死骸を何うかしろよ。人が集つて、見つともないからな。」

「眞實だ。お前、手傳つてくれ」といふと、現場へ一目散! いきなり、死骸を抱き上げて、

「死骸は、成程俺に相違ないが、すると、今、死骸を抱き上げてゐるこの俺は、誰れだらうなあ?」といつたとか。この裡、若干の眞意がある。

熊公が己れを忘れたのは、餘り慌てたからである。まだ罪がない。小人は、名利の爲めに己れを忘れる。即ち、心を奪はれる。奪はれた心は、取り返さなければならぬ。孟子の所謂、放心を求めなければならぬ。放心を求めぬの道、それは他ではない、たゞ反省することに在るのである。



第六 言語

1 本多重次の直言

◎簡略は肝要を略す  
無用を省く  
川如丸  
りす義を略す  
丸如丸  
丸如丸

人の生活は、宜しく簡易、簡易にあるべきである。衣、食、住も、簡易なのがよい。禮儀も、簡易なのがよい。朋友との交はりも、簡易なのがよい。心づかひも、簡易なのがよい。言語、最も簡易なのがよい。所謂簡易生活は、當然、言語に迄及ばなければならぬ。簡易は、即ち、簡略である。簡略の「簡」は、えらぶと訓む。事の肝要を擇んで、無用を略すること、これを簡略といひ、又た、簡易といふ。人の生活は、この簡易なのをよしとする。

本多作左衛門重次は、爲人の粗豪太簡な、俗にいふ、大竹を割つたやうな男であつた。家康は、そのまだ三河に在つた頃、これを擡んで奉行に用ひ、高力、

◎我れを知らざれば老し我れを知らざれば老し我れを知らざれば老し

天野等の人々と、國政に當らせることにした。家中の人々は、平生、重次の一言一行が、餘りにおほまかなことから考へて、

『今度、作左を奉行になされたのは、殿様のお眼鏡遠ひぢや。あの男が、何、人の上に立つ器なものか。』と誹つたが、事實は反對、一切、繁文褥禮を廢して、法三章的の政治を行ひ、情實にも利害にも頓着しないで、どんどん、事を取り裁いて行つたので、國內は、大いに治まつた。諺に所謂る、「人は見かけに寄らぬもの」のである。

天正十八年二月、家康は、豊臣秀吉の小田原征伐に従ふ爲めに、當時の居城濱松を發して、駿河の長窪に軍した。三月、秀吉は、岡崎へ來た。重次は、時に岡崎に留守してゐたが、出迎へやうともせず、秀吉がこれを召すと、

『俺の主人でも何でもない。お目見えには及ぶまいて。』といつて、斷じてその召しに應じなかつた。心の使ひ方が、直截簡明、極めて簡易であつたのである。







に始まつて、事に對する心づかひから、更に、言語に迄も及ぶ。簡易生活の理想は、一ぱらこゝに在るのである。

## 2 賢しき女

女の賢いものは、餘りあり難いことではない。賢い女に限つてよく喋べる。眞に賢いのは、結構であるが、多くは鼻つ先の思案が利くといふ迄で、深い思慮、深い分別があつての賢さではないから、その多辯の爲めに、事を破る場合が少くない。古來、沈黙を以て女の最大美德の一つとするのは、恐らくこの理由によるのであらう。

或の農夫、牛を賣ることになつた。で、その旨、妻にいひ置き、外出すると、その後へ、買人がやつて来て、つくづく、見檢べた末に、  
「この牛は、三歳ですわね」と訊く。

◎予は歴  
辯たして  
ひ黙たして  
もひ黙たして  
悔もひ黙たして  
ど悔もひ黙たして  
なるこひ黙たして  
バなるこひ黙たして  
スバなるこひ黙たして  
イリ...はたして  
ラア...はたして

「否、五歳ですよ。」と答へた妻の心では、なるべく年嵩にいつた方がよい、と然う思つたのである。

「五歳？ 否、三歳でせう？」

「否、確かに五歳です。或ひは、六歳かも知れませんが。」  
買手は頻りに首を傾けて、

「然うですかねえ。三歳でも、少し年を老り過ぎてると思ふのに、五歳、六歳と聞いては、一寸手が出ませんねえ。」といふと、その儘、

「はい、然やうなら……」

妻は、開いた口が塞がらなかつたいふ。

諺に、「女賢しうして、牛賣り損ふ。」といふのは、この事である。眞に賢くありたいと思ふ女は、この點、大に注意すべきである。

◎女賢  
賢て賢  
うして賢  
賣り損ふ  
...損ふ  
...損ふ



3 漢の朱雲言を盡す

簡易生活の理想は、言語迄も簡易にして、初めて實現される。口數が多いと、つひ、牛を賣り損ふやうな失敗がある。沈黙が美德であることは、今更、いふ迄もないが、すべての場合に啞者を學ぶのも、これ亦た、譽めたことではない。黄山翁は、「萬言、萬當するも、一黙に如かず。」といったけれど、萬當する萬言ならば、何等、不可とすべき理由はない。要は、いふべきをいつて、而も、贅言を省き、冗語を略して、口數を少くするに在るのである。

漢武帝の時、外戚王氏の禍兆、漸く著るしく、權、朝廷を傾けやうとした。憂ふる者、前の南昌の尉海福は、上書して、「方今、君命犯されて、主威奪はれ、外戚の權、日に益す盛んなり。陛下、その形を察せず。願はくは、その景を察せよ。建始以來、日食、地震、春秋に三倍し、水災、與に比數するなし。陰、盛ん

夫の人は必ず入  
いへば必ず入  
らへば必ず入  
ことある必  
孔子

横や剛欲  
焉んぞ剛欲  
を得ん  
孔子

子罕に  
利と命とに  
仁とを論  
語ふ

にして、陽、微に、金鐵、爲めに飛ぶ。これ、何の景ぞや。」と迄極言し、他にも吏民中、これをいふ者が多かつた。

時に、安昌侯張禹は、帝の師傅として、大政毎に、必らずその議に參畫した。一日、帝は、態々、その第へ臨んで、親しく吏民の上奏書を示した。張禹にも、王氏の憂ふべきことは解つてゐた。けれど、張禹は、自分は、最早や、老年に及んでゐる。子孫は、無勢力である。この場合、怨みを王氏に買ふのは、不利益の極だからと、すゝい、横着な考へを起して、

「春秋の時の日蝕や地震は、或ひは、諸侯が殺し合つたり、夷狄が中國を侵したりした、その爲めかも知れませぬ。けれど、變災の意味は、極めて深遠で、孔子も、滅多には命をいはず、怪、神を語られませぬでした。性や天道は、子貢の屬からも、聞くことは出来ませぬ。況してや、淺見な鄙儒共のいふこと、取るに足るものですか。少しばかり學問をした生物識などが、道を亂し、人を誤るのは、



不届き至極で、決して御信用なさらぬが宜しい。』とお答へした。孝武帝は、

「成程!」と頷いて、爾後、王氏を疑はなかつた。

すると、これを憤慨した前の槐里の令朱雲は、上書して拜謁を願ひ、

「何卒、お臺所で馬を斬られる刀を拜借して、或る佞臣の首を斷ち、そして、他の者を勵ましたいと思ひます。」と申し上げた。

「佞臣とは誰ぢや?」

「安昌侯張禹でございます。」と答へると、帝は、以ての外に立腹して、

「下にゐる小臣の癖に、天子の師たり、傳たる者を、而も、朝廷で辱かしめるとは、その罪、死ぬとも赦さぬぞ。」と叱りつけた。

所へ、御史の役人が立つて出て、朱雲を引き出さうとか、つた。朱雲は、その手を拂つて、御殿の欄干を攀ぢた。欄干は、めりめりと折れた。朱雲は、尙も口を噤まず、

◎夫の佞者  
…孔子

◎欄干は

歳寒に影  
…はれ  
見は國危  
…文選

◎巧言令  
…色鮮  
…孔子

「私は、地下にゐる古への忠臣、龍逢、比干などに従つて遊ぶことが出来れば、

それで充分、他に望みはござりませぬ。あゝ、朝廷は、今後、如何なり行くことやら…。」と叫び立てた。帝は、益す立腹して、朱雲に極刑を加へやうとした

が、左將軍の辛慶忌が、頭を叩き、血を流して、熱烈に諫争したので、帝の意も解け、その事なくして済んだ。

後ち役人が、欄干を改造しやうとすると、帝は、

「それには及ばぬ。折れた木を輯めて、一寸、繕つて置けばよい。然うして、直臣を旌はすのぢや。」と命じたとか。

朱雲の直言、眞に感ずるに餘りがある。沈黙の美德であることに藉口して、その實、一身、一家の利害を慮り、いふべくしていはない者は、張禹の亞流で、その醜、その陋、鼻を掩ふに堪へたりである。今の世、權門に出入し、勢家に倚頼する者は、滔々として皆それである。あゝ、夫の佞者を惡む。」



### 4 野中の剽盜

ホーマーはいつた「思慮なき人は、常に談ず」と。談じてそして禍を招く。「談話を爲すには方りては、誰に話すか、何を話すか、何處にて話すかを注意」(ホーマー)すべきである。

兄弟二人、旅をして、野を横ぎる折、圖らず剽盜に出遇つた。はしこい弟は、急ぎ叢へ身を隠したが、のろまの兄は、忽ち捕まつてしまひ、衣服を剥がれやうとすると、

「あゝ、待て。この衣服は、世界に二つとない立派な衣服で、俺の寶だ。やるわにけ行かない。その代り、これを渡すから、我慢してくれ。」

といひながら、懐ろから、きらきら光る指輪を出して、

「これは、純金だよ。この石も眞物だ。これをやるからな……何、眞物だと？」

◎音血にはよそ  
の無損にはよそ  
の有り無損にはよそ  
の知れずにはよそ  
のそよよそ  
を大に  
知る小

セニス

それなら、彼處に弟が隠れてゐるから、問いて見給へ。弟は、寶石商人だから、何も、彼も、知つてる筈だ。」つべこべとやつて除けた。

すると剽盜は、

「汝は、近頃、珍らしいうつけ者だな。」とばかり、衣服も、指輪も、剥ぎ取つた上に、弟を目つけ出して、その持つてゐる寶石類を、全部、奪ひ去つたのとことである。

正直は、美德である。けれど、相手構はず、場所構はずに、事實をその儘いつてしまへば、往々、この種の失敗がある。思慮のない多辯家程、世に哀れむべきものはあるまい。

### 5 赤穂の二士使命を辱かしむ

同じくこれ言葉である。而も、人に對して權威のある言葉もあれば、權威のな

◎論議

赤穂の二士



君れ與せば  
色莊者か  
孔子

◎を知らず  
友人を知らず  
その心を知らず  
その君を知らず  
その家を見ず

◎河暴虎馮  
悔死なきて  
は吾れ必  
せしむる者  
を好んず  
成を謀る者  
孔子

い言葉もある。畢竟、いふその人の人格によつて岐れるので、おつちよこ才子の千言萬語は、至つた人の一黙にも如かぬ。左右は腹藝である。

前に、大石良雄のことを記した。聞いて、血湧き、肉躍るの感あるものは、良雄等赤穂四十七義士の事蹟である。最初、凶變の報が傳へられた時、一藩の輿論は、衆説區々、殆んど歸する所がなかつたのを、良雄は、程よく裁断して、取り敢へず、籠城、哀願の議を決した。

『殿には御生害、お家は断絶といふことになつたけれど、後にはまだ、大學殿が在らせらるゝ。半地なりとも、下し置かるゝやうならば、お家の爲め、不幸中の幸ひと申されやう。我々は、死を以て、大學殿お取立の御詮議を哀願しやう。』良雄の意見は、斯ういふのであつた。

乃で良雄は、その哀願使として、藩士中、辭令に嫻ひ辯舌に熟した多川九左衛門、月岡治右衛門の兩人を選び、一書を附して、急ぎ江戸へ發足させた。その書

は、今度、赤穂城受取の使者を命せられた荒木十左衛門、榊原采女兩お目附への願書である。

兩使出發の際、内藏助は、

『江戸へ着かれたらば、直ちにお目附衆のお屋敷へ參られよ。そして、願書が納まつたらば、戸田采女正殿へ別紙を差し出すことにし、藤井や安井には逢はぬがよい。大學殿のお耳へも入れぬやう。』とくれぐれも申し聞けた。采女正は、淺野内匠頭の從兄弟に當る人、又た、藤井、安井は、江戸定府の家老である。

哀願使兩人が赤穂を發したのは三月二十九日(元祿十四年)。四月四日、早くも江戸へ着いたのであるから、その間、中四日を経たに過ぎない。所が意外、兩お目附は、四月二日、既に江戸を發して、事は「後の祭り」である。兩人は、驚いた。そして、良雄の注意にも關はらず、藤井等の兩家老を訪ね、使命の趣きを告げた。凡骨の兩家老は、びつくり仰天の體で、



口雀の千  
一驚  
怪証

◎平日和  
日於於  
最人多  
有於於  
怖於於  
な最日

「それは飛んでもない事！ 大學殿へ何んな御災難が降りかゝらうも知れぬ。左に右、戸田殿のお指圖を受けられよ。」斯ういつて、二人を戸田邸へ案内した。

采女正は、一應、願書を披見して、これ亦た一驚、

「以ての外ぢや。」と叱りつけ、

「就いては、采女正、赤穂へ申し遣はすことがある。赤穂の者は、果して納得するか、否か。それとも、兩人は、是非、お目附へ申し上げる氣か。先づそれを聞かうではないか。」といふ。兩人は、その權幕に吞まれてしまった。

「否、然ういふわけではござりませぬ。たゞ、筋の立つた御越意さへ承はりますれば、この儘、引き取らうと存じます。一應、御書面を拜見いたしました上で……」と弱い音を吹く。

乃で采女正は、一書を認めて、兩人に見せた。書面の内容は、要するに、温なしく城を明け渡せ、といふに在る。

るものな  
り……ジ  
エアミ  
テ……ラ

「何うちや？ 兩人は、この書面の趣きを以て、家中を取り鎮めることが出来るかの？」

「はい、出来やうと存じます。」とばかり、戸田邸を辭し、悄然として赤穂へ歸つた。

何のことはない、兩人は、江戸へ説諭を聞きに行つたやうなものである。

良雄は、呆れ返つて、

「お目附御出發の後とあつたら、何故、お後を追つて、せめて大阪でなりと、願書を差し上げられぬ？」と残念がったが、それも「後の祭り、」最早や、何とも仕方なかつた。

赤穂義人録の著者室鳩巢は、この事を評して、「意ふに、二子、素より材辯の自ら好きありて、良雄と雖も、虚譽に眩して、これを用ひしなり。夫れ、緩急、命を辱かしめざるは、たゞ大節ある者、これを能くす。豈、口辯、色莊の士の能く

◎信言は  
美ならず















◎虎豹未だの  
文は成さだ  
すとも難も  
既に牛を  
食ふの氣  
あり

勇 氣 一 二 八  
を不便がり、腰元共にいひつけて、朝飯を與へさせ、再び袋の口を封じた。  
晝になると、將軍が歸つて来て、復も吟味にかゝつたが、信綱は、たゞ前言を  
繰り返すばかり。所へ、御臺所が詫びたので、將軍も、  
「以後を慎しめ。」とばかりで、信綱を釋放した。  
そして、その後ろ姿を見送りながら、  
「あれが今の心で生ひ立つたら、竹千代（家光の幼名）の爲めには、頼もしい忠  
臣になるのぢやが……」といったとか。將軍は、長四郎の彼の擧が、家光の指圖  
に出たことを、夙に推してゐたのである。  
まこと、これ程の勇氣、これ程の忍耐があつて、人は、他人の爲めにも、自分  
の爲めにも、頼もしい人であり得る。あゝ、口尙ほ乳臭い十二齡の子に、この非  
常の擧があつたとは！

## 2 金剛力士

◎文王のつ  
び怒一  
天を安ん  
民を安ん  
す

同じ一口の劍でも、用ひ方によつては、人を活す活人劍にもなれば、人を殺す  
殺人劍にもなる。勇氣がやはりそれで、桀紂の勇氣は、以て天下を苦しむるに足  
り、文武の勇氣は、以て天下を安んずるに足つた。所詮は人に在る。望ましいの  
は、善に勇み、義に勇み、道に勇む、大人の勇である。  
神か、佛か、五大尊といつて、五人の明王がある。一人は中央、他は四方に向  
つて、佛法守護の任に當つてゐるといふので、北方のを金剛夜叉と呼ぶ。  
この金剛夜叉は、元と王子である。王は、古今無類、驚くばかりの子福者で、  
千二人の子があり、その千人は、釋迦佛に歸依して、首尾よく佛の數に入つた。  
すると、残つた末子二人の一人は、  
「兄さんたちの後にくつゝいて行つて、佛の仲間へ入るのも、餘まり氣が利かな



◎安達と原  
に達か心  
行かす  
ともか  
の中行  
住ふに  
古歌

い話だから、俺は、方角違ひのことをする心組だ。』

『何うするのだ？』他の一人が聞くと、

『俺は、悪魔になつて、兄さんたちを悩ましてやる。』これは又た、詰ちぬ望みを起したものだ。

すると、他の一人は、殊勝にも、

『俺は違ふ。俺は、大力士になつて、兄さんたちの爲めに、佛法を守護して上げたい。』と、遂に五百の夜叉を配下につけ、妙高山に住んで、永く護法の神になつた。これが即ち金剛夜叉明王、俗にいふ金剛力士である。

末子二人、その勇氣に於ては、逕庭がなかつたであらう。たゞその用ひ方を異にした。活人劍にするか、殺人劍にするか。擇び方を誤まつてはならぬ。

### 3 掃部と方齋舊を語る

◎匹夫辱  
かしめ  
をばめ  
起し  
挺ち  
ふし  
勇と爲  
るに足  
蘇東坡

人間、心の激した際には、随分、思ひ切つたことをする。それは、眞の勇氣ではない。容易に激せず、驚かず、従容として、困難に當るのは、餘程、度胸の据つた、所謂の沈勇の士のみの能くする所であるが、眞の勇氣は、この沈勇でなければならぬ。

越前の太宰守結城秀康は、初めて封に就いた時、その地の人阿部掃部の勇名を耳にし、祿を重くして招聴した。狛伊勢、これ亦た、越後代々の家來で、勇名のあつた人であるが、或る時、その子の爲めに、鎧着の禮を行はうとして、掃部を請じた。

儀式も既に終り、酒宴に移ると、主人の伊勢は、掃部に向つて、

『何卒、貴殿のお手柄話をされて、俸の生先をお祝ひ下されよ。』と所望した。掃部は、稍恐縮して、

『否、拙者の手柄といつて、何も、お話しするやうなことはござらぬ。けれど折

掃部と方齋

◎模範  
も優れ  
教訓  
理も優  
怪談  
獨逸



◎音等は  
敵をも  
ばざる  
からず  
ニニニ  
エニニ  
チニニ

角の御所望故、たゞ一つ、申し上げませう。實は、様子の如何にも立派な士を見たことがござるので……』といつて、懷舊談を始めた。  
賤ヶ岳の戦ひの時、敵も、味方も、それぞれ、陣地へ引き揚げた。掃部も、だ  
い一騎、余吾の湖の畔りを退いてゐると、後ろから、  
『お、い、お、い。』と呼ぶ者がある。馬首を回して、  
『呼び留められたは、貴殿でござるか。』  
『如何にも。今朝以來、數多の敵を殲しはしたが、それは皆雑兵ばかりで、運悪  
く、まだ好敵手に出遇ひ申さぬ。貴殿の御様子を見るに、何うやら、尋常の人で  
はないらしい。この場に於て、勝負をいたさうではござらぬか。』  
掃部、素より辭する者ではない。  
『宜しい。』とばかり、ひらり、馬を下りた。  
すると、相手も、馬を下りて、

男 氣

一三二

◎胸置  
小なる  
事は  
なり  
春日  
日  
番  
座

◎討つ者  
討つ者  
も討つ  
共にも  
電置  
大是  
内觀  
義

『暫時、お待ち下されよ。鎧が血で汚れてゐる。』と斯ういつて、穂先を湖水へ入  
れ、丁寧に洗ひ終ると、すつくと立つて、  
『お待たせいたしました。さあ、これで大丈夫!』と、身構へた。  
斯くて二人は、一上一下、受けつ、流しつ、各、秘術を盡して戦つたが、何れ  
劣らぬ勇士と勇士、勝負は容易に決しない。  
する中に、日がとつぷりと暮れてしまつた。相手は、  
『残念ながら、最早や、鎧先が見え申さぬ。他日を期して、今日は、この儘、別  
れといたさう。拙者は、青木新兵衛と申す者でござる。貴殿のお名前は?』  
『阿部掃部と申す。』と答へると、  
『然やうか。では、後日、戦場で出遇つたら、勝負を他人には委せませぬぞ。』  
『それは、拙者も望む所!』兩人、固く相約して、鞭を擧げて、立ち別れた。  
掃部は、右の話をして、

掃部と方齋

一三三



◎事實は  
往々小説  
よりも奇  
なり……  
西洋俚諺

「拙者は、子供の時から、幾度となく戦場へ出ましたが、あんなに落ちついた、實に餘裕のある士は、曾て見たことがござらぬ。」

といひも終らぬ所へ、突然、屏風の陰から出て来たのは、この家の食客青木方齋といふ者である。掃部に一禮して、

「只今、貴殿のお話を承はつて、思はず、懐舊の涙に咽んだやうなわけ。最早やお忘れかは存せぬが、あの時、貴殿と鎗を交へたのは、即ちこの老人でござる。」とこんなことをいふ。一同は、驚いた。掃部は一入、じつとその顔を打ち眺め、掌を拍つて、

「これはお久しぶり！ こゝでお目にかゝるとは、實に奇遇でござるなあ。」と、快驚の情を述べ、盃を差した上に、好ものとして、腰の大小を贈つた。

こゝに於て、青木方齋の名は、一時に高くなつた。傳へ聞いた秀康は、これを召し出し、掃部と同じだけの祿を與へた。

◎虎の威  
を借る狐  
……俚諺

これが所謂沈勇なるもので、即ち、眞の勇氣である。腹立ち紛れの勇氣、血氣の勇氣は、三文の價値もあるものではない。

#### 4 子山羊の強がり

眞の勇者は、自分の實力以外、他に恃む所はない。世には、官位を恃み、身分の高いのを恃み、親の威光を恃み、財産を恃み、權門勢家の後援を恃み、朋友の助力を恃んで、自ら強がり、人を眼下に見下す者が往々ある。その醜、その陋、鼻を掩ふに堪へたりである。而もその強がり、眞の勇者の一喝に逢つて、忽ち眞價を曝露するに於て、甚はだ嘲笑すべきである。

臆病な子山羊が一匹、自ら安全の場處だと信する高い岩の上にて、下の狼に種々の悪口を浴せかけた。狼は、せゝら笑つて、

「馬鹿野郎！ そんな口を利いて、汝は、俺をからかふ心組か。汝の悪口は、汝



爾に返るは出  
づる者に出  
爾に返るは出  
づる者に出

の口から出るのぢやないぞ。汝の立つてるその場處から出るんだぞ。こゝへ降りて来て見ろ。汝の調子は、忽ち變つてしまふのだ。臆病者め！ 卑怯者め！」と罵り返すと、子山羊は、後脚の一本を擧げて、

「生意氣いふな。俺の小便でも甜めやがれ。」とばかり、じよんじよんとやり出した。狼は、餘りの腹立たしさに、うゝゝゝ、ツと一聲、怖ろしい唸り方をした。弱虫である上に、岩のとつ先へ出て、而も、三本脚で立つてゐた子山羊は、この聲に氣を呑まれ、どつと下へ轉がり落ちた。そして、逃げ出す暇もなく、狼に嘯み殺されてしまつた。

哀れな小山羊！ 人間仲間にもこれが多い。

### 5 矢田作十郎金鯉の兜

古への勇士は、戦場に臨む時、先づ死を決した。太平の世、命を賭して當らな

末に山川  
みを殺せるの  
いを殺せるの  
ふを殺せるの  
歌れぬは古

ければならない程の大事事件は、滅多にあるまい。滅多にはあるまいが、又た、絶無とはいはれない。勇氣の大なるものは、この、死を決する邊から生じて來るのである。

元龜、天正の頃の三河武士は、それこそ無敵のつはもの揃ひで、徳川家康は、この輩を率ゐて、天下を一統したのである。その一人に、矢田作十郎といふがあつた。赤穂義士の一人矢田五郎右衛門の先祖で、石瀬の戦ひに、敵の首に併せて金鯉の兜を手に入れ、爾後は、戦ふ毎に、それを冠つて出た。金鯉の向ふ所、敵は、戦はない前から膽を消すといふ有様で、作十郎の勇名は、一時、海道に鳴り響いた。

すると、同家中の阿部四郎五郎といふ者が、一日、作十郎を訪ねて來て、「近頃、無駄けなるお願ひながら、金鯉の兜をお貸し下されよ。拙者も、あれを冠つて、一度、華々しく働いて見たい。」といふ。作十郎は、言下に、







◎争ひ人と止物  
せしむるに無  
く候て事な  
益の申すべ  
り申すべ  
石川丈山

男 氣

一四〇

が、勇氣を用ひるに就いては、この謀が要る。即ち敵たる困難の真相を究め、己れの實力を省み、時と場合とを察し、方法を案じ、利害得失の如何に迄、充分の注意を拂つて、然る後ち、勇氣を用ひるのでなければならぬ。一旦の怒りに乗じて、無謀の舉に出、謔にいふ、「螳螂の斧」的の事をするのは、眞の勇者の爲ではない。

或る愚人、半錢の金のやり取りから、大喧嘩を始め、散々な目に遇ふと、もう口惜しくて堪らない。

「何とか報復してやりたいものだ。」と、寝ても、起きても、考へる事はこればかり！

すると友だちが、

「お前、何うかしたか。大層、顔色が悪いよ。」と聞く。愚人は、委細を話して、「だから、報復をと思ふけれど、その手段がない。それが爲めに、毎日、氣を鬱

◎人を誑  
はいて穴二  
はつ……  
便二

いでゐるのさ。」と力なげにいふと、友だちは頷いて、

「それは、氣の毒だ。實は、俺に一つの秘法がある。その秘法を用ひて、相手を誑へば、わけなく殺してしまわれるのだが、こゝに一つ、困ることには、相手がまだ死なない前に、お前が死んでしまふからなあ。」

すると愚人は、

「何、相手を殺すことが出来れば、俺は、命を捨てゝも構はないよ。」といったとか。

螳螂は、龍車を避けない。鬪雀は、人を怕れない。一朝の怒りに、その身を失ふ愚人と何れ？







「自分は、寧ろ、俗事で生活を立てたい。文藝で生活することを欲しない。」と。勤勉の結果、スコットの學問は、次第に深博を加へ、その名も、漸く世に聞えしたが、決してそれに満足しないで、益々、智能を磨くことに努力した。

「自分は、過去の経歴を考へる毎に、何となく自分の愚かさが思はれて、爲めに鞭撻されるやうな感じがする。」友人に語つたこの言葉などは、正しくこれ、世の少年、青年の紳に書すべきものであらう。

スコットが出版事業に失敗して、大枚十二萬磅の債務を負うた時には、既に五十歳に達してゐた。常人ならば、落膽の極、或ひは失神したかも知れない。けれどスコットには、多年、勤勉の習慣が養はれてゐた。だから、この大負債を物ともせず、一ぱら返済のことに力めて、死ぬ前には、終に能くその目的を成就した。その間の勤勉が想ひやられる。

◎知らざ  
るを知ら  
ずとせよ  
これ知る  
なり  
孔子

◎暇ぐ  
に  
追ひつ  
ひなく  
貧乏に  
乏しく  
乏しく

勤勉なるかな。現に順境に在る者は、勤勉によつて、その幸福を層一層ならしめることが出来る。現に逆境に在る者は、勤勉によつて、その逆境から脱出することが出来る。勤勉の人は、高く境遇を超越してゐる者ともいはれやう。勤勉なるかな。

2 蜻蛉の失敗

人間、樂みがなくてはならぬ。樂みを求めるのはよい。要は、その樂みが、絶對的のものではなく、樂みの後には、必らず苦みの控えてゐることを知つて、若干の制限を加へるに在る。前に苦しむ者は、後に樂しみ、前に樂しむ者は、後に苦しむ。この理を解して、若い中には、精々、勤勉の道を勉め、老後の樂みを待つこと、これが最賢、最良の處世法である。

夏の炎天に照らされて、蟻がせつせと餌を運んでゐると、羅の羽織を着た蜻蛉

蜻蛉の失敗



よ、生を、見は、  
蠅の、活の、道は、  
その、役を、  
ひた、るに、  
身を、改む、  
せよ、と、  
ト、ト、ト、  
ト、ト、ト、

が、涼しい葉蔭から打ち眺めて、  
「馬鹿な奴等だ。五十、七十迄生きる人間の中にさへ、「人生、百歳なし。何ぞ自ら苦しむること斯くの如くなる。」といった者がある。況して虫仲間、明日の命も知れやしない。この炎天にあんなに稼いで何うする氣だらう？ 體が小さいだけに、智慧もやはり小さいと見えるわい。」と、さんざ悪口を浴せかけて置いて、その儘、水邊へと飛び去つた。

起、雞、鳴、に、  
起、目、ざ、れ、に、  
悔、あ、り、成、  
悔、正、成、

やがて夏は過ぎて、秋になり、秋も漸く闊といふ頃には、夜分など、羅の羽織では、ちと寒さが身に沁みる。する中に、忽ち冬が来て、或る朝、起きて見ると、降り積む雪に、見渡す限り、銀世界になつてゐる。人間の風流家なら喜ぶだらう、蜻蛉に在つては、餌を求むるに處もなく、これ、最大御難である。乃で蜻蛉は、蟻の許へ餌を借りに行つた。  
「蟻さん、眞に濟まないが、何か喰べる物をちつとばかり……」腰低く出ると、

蟻は、體中を眞つ赤にして、

「馬鹿ッ！」と怒鳴りつけ、

「汝は、この夏頃の蜻蛉ぢやないか。俺たちに浴せかけたあの悪口、忘れはすまい。働くべき時に働かなければ、後日、困ることは、目に見えた話で、汝に今日があるのは、因果應報、仕方がない。今になつて、餌を貸せなぞと、駄目なことだ。憤々としていふのである。蜻蛉は、泣かないばかりに情氣返つて、  
「ではござりませうが……」

「煩いッ。明日の命も知れないとか、何とか、悟り顔にいつた汝だ。死ねばいい……いや、待て。同じ死ぬ汝なら、俺たちが殺してやらう。そして餌食にしてやらう。」

「それがいい、それがいい。」と、蟻は、寄つて集つて、蜻蛉を刺し殺してしまつた。

◎金を、借、  
りに、行、  
は、ひ、  
招、き、  
く、  
ン、  
ベ、  
コ、



蜻蛉の運命は、亦た、人間の懶惰漢の運命である。これを戒しめよ。

### 3 井伊直孝の儉素

近來、奢侈の風が著るしく増長して、殆んど底止する所を知らない。質朴なものとされてゐた農夫迄が、バナマ帽子を冠り、巻煙草を唾へながら、鍬、鋤を打ち揮るといふに至つては、これを十年の前に比較して、實に隔世の感がある。希臘は、何の爲めに衰へたが。羅馬は、何の爲めに亡びたか。奢侈は、一人一己の小問題ではない。今の人の奢侈は、國家の前途に對して、甚はだ寒心すべき現象でなければならぬ。

元龜、天正頃の武士は勿論、降つて徳川時代になつてからも、武士の生活は、極めて質素なものであつた。三代將軍家光の時、大老酒井雅樂頭忠清が、春の末でもあつたのか、汗になつた下着を脱いで、御殿の欄干にかけると、處々、繼ぎ

◎節制して生ずる者  
活する者  
は名譽な  
亡すべし  
丁抹

が當つてゐる。流石に醜く思つて、歸邸後、その事をいふと、件の下着を縫つた老女は、

「時勢が移つて、殿様にも、追々、奢りにお流れなされたのでござりませう。行末は左にあれ、妾の一生は、今のやうにありたうござりまする。」といったとか。又た、關ヶ原の戦の後、伏見の成瀬吉右衛門の許へ、その子隼人正が、駿府から、遙々、金を贈つて來た。すると吉右衛門は、居室の天井にそれを吊つて、折柄の客に、

「あれを御覽下されよ。魚を食へといつて、隼人から贈つて來た金でござる。あれを見ると、旨い物とは又た一段で……」と、にこやかに語つた。

それは、無論、吝嗇からではない。衣食には出来るだけ儉約して、その金を貯へ置き、軍用などの爲めには、惜む所なく投げ出すといふ、これが古武士の心がけであつたのである。だから、大阪冬の陣が濟んだ時、隼人の子某が、祖父なる

◎奢る者  
は心常に儉  
質する者  
は心常に儉  
なる者  
は心常に儉  
心常に儉  
子化書



吉右衛門を訪ねると、

『今度は、何事もなかつたけれど、今に復た、戦があるに相違はない。その時、良い馬を買へ。江戸、廣しと雖も、金二十枚の馬は、然のみ多くはあるまい。これを遣はずぞ。』斯ういつて、二人の孫に、金二十枚づつを與へたとか。當時の武士は、大概、こんな風であつた。

前記冬の陣の時、井伊直孝の士二騎、斥候に出て、二騎共、雨に濡れて歸つて來た。直孝は、

『大儀！ 大儀！』と勞らつて、着てゐた二枚の小袖を脱ぎ、これに與へた。後には着るべき物が無い。已むなく安藤帶刀の許から小袖を貰ひ受け、革袴を穿いて、前將軍家康、今將軍秀忠の前へ出た。質素の状、想ふべしである。

所がこの直孝も、大老在職中、奢りに就いて、町奉行の石田某に、赤面させられた。一日、直孝が食事をしてゐると、そこへ石田が訪ねて來た。時に直孝の膳

●人君と  
なりては  
仁に止ま  
るに止ま  
る……大

●剛毅木  
訥は仁に  
近し……  
孔子……

●上を見  
習ふ下……  
…………

●平生傍  
客一つ合  
主の外は

には、叔母からの到來物、鯛の鹽焼きが上つてゐた。石田の氣象は、直孝、夙に知つてゐる。事面倒と、急ぎ、膳の蔭へ隠して、

『さあ、あ、此方へ……』

『御免下されよ。』と入つて來た石田は、直孝の膳の上をつくづく見て、

『大老には、白米の飯をお食りでござるな。侍、町人を問はず、奢りの風が、大分、著るしくなつて參つたが、上を見習ふ下とやら、據ろのない儀でござる。』忌憚なくいへば、直孝は、顔を眞つ赤にして、返す言葉もなかつたといふ。

といふのが、戦國武士の常食は、殆んど玄米に糠味噌と限られたもので、この風は、徳川時代にも及び、たい、味噌汁が膳に上るやうになつた位、白米などは、何か儀式の日の外は、決して口にしなかつたのである。家康は、驚狩に出る都度、特に辨當を持たず、焼米を嚙つて平氣でゐた。加藤清正は、家中への扶持米に玄米を用ゐ、特に布令を出して、玄米を常食にさせた。直江兼續は、



話申す  
間敷候  
飯は黒米  
食たる  
藤清正加

勤 儉

一五二

「朝餉には、鹽菜で澤山ちや。それ以外、蓼を食ふのも、贅澤の嫌ひがある。」とさへ極言した。鹽菜で朝飯を濟す者が、今の世に一人でもあるか。抑も今の奢侈は、那邊に原因するのであらうか。一概にいひ得ることではないが、俄か分限者、成金の徒が、その低劣極まる人格を以てして、非常識に近いやうな、正氣の沙汰ではないやうな、馬鹿げた奢り方をして、世間へ見せびらかすといふこと、これ亦た、一原因でなければならぬ。彼等の奢侈は、彼等一人の私事ではない。彼等は、社會國家に對して、大罪惡を犯してゐるのである。

#### 4 蚯蚓と兜虫

佛國の諺に、「巴里は、一日にして成れるに非ず。」といふ。世間、才智の優れる人、性急な人は、手つ取早く大金持ちにならうとして、相場事、山師事に手を出すけれど、それは、甚はだ宜しくない。平生、勤儉の二字を守り本尊にして、後

○人知ら  
すして  
らす子  
らす子  
た君子  
ら子  
孔子  
な亦

生大事に日を送れば、或る程度迄の成功(?)は、必らず贏ち得られるのである。要は「急がずに、休まずに。」(西洋俚諺)の心がけがあればよいのである。蟲仲間では、武士と崇められてゐる兜蟲が、夏の或る日、蚯蚓に出遇ふと、「おい、百姓!」と呼びかけて、誇り顔にその申胃を示し、大木を貫く腕力の程を吹き立て、更に蚯蚓の身の上に及んで、「それに引き換へ、年中、土の中に潜つて、何一つ仕出來すこともなく、徒に生涯を送るお前は、餘りといへば無氣力過ぎる。ちと奮發したら何うかい。」と大氣焔である。けれど蚯蚓は、耳がないのか、聞えぬのか、空吹く風程にも感じない様子で、徐々と歩み去り、上層の土を下層へ、下層の土を上層へ運ぶ例の百姓働きに餘念がない。兜蟲は、張合抜けがして、その儘、どこへか飛び去つた。その後ち、兜蟲は、公園へ散歩に出かけた。そして、記念碑の側迄來ると、役人らしい口髭の男、人足らしい半纏着の男などが、二三十人集まつてゐて、

蚯蚓と冠虫

一五三



「成程、この記念碑は、大分、傾いでる。こりや危険だ。」  
「それにしても、何うしてこんなになつたのでせう？ 地盤は、充分、搦き固めてあるだ筈だが……」

「不思議だ、實に不思議だ。」

「左に右、取り崩して、建て直すとしやう。すれば、原因も判るだらう。」といふ役人の指圖に、人足共は、

「えんやらのどつこいしよ！」と、わけもなく記念碑を倒した。

そして、よく調べて見ると、驚くべし、蚯蚓が記念碑の下へ、無数の穴を穿つたので、自然、地盤が緩み、爲めに彼あした結果を來したのである。

人々は、事の意外なのに驚いたが、最も驚いたのは、物蔭に小さくなつて、始終の様子を見てゐた、彼の兜蟲である。日頃、侮り抜いてゐた土百姓の仕事が、その實、甚はだ侮るべきでないことを知り、却つて自分の意氣地なしが小恥づか

◎起て坐る  
農夫は坐る  
せよ紳士  
よりも高  
しランク  
ンク  
ンク  
ンク  
ンク

しくなると、羽を展げて、何處ともなく逃げ失せたとのこと。

即ち蚯蚓は、才によらず、智によらず、地道に勤勉の力によつて、記念碑を傾ける程の、大した仕事を成し得たのである。人間の事、亦た、その通りと心得てよい。成功の訣は、たゞ、勤勉に加ふるに節儉を以てするに在るのである。

### 5 岡野左内黄白に執せず

何の爲めに節儉するか。盲目的に金を溜めて、使ふことを知らないのは、所謂吝嗇なるもので、その弊は、奢侈よりも甚だしい。使ふべきに使つてこそ、活運靈動、金、こゝに於てか用があるのであるが、さて、その使ふべき事柄は何かといふこと、これが一つの問題である。單に自分の爲めにのみ使つたのでは、節儉の美德たる所以が明瞭でない。更に人の爲めにも使ふ。孔子が、「用を節して人を愛す。」といったやうに、平生、成るべく費用を節し、蓄へ得た金を、國家の爲

◎施すに  
と好む  
者誠の  
大徳の  
なりし  
に事な  
知ること  
者其の  
守は眞  
伊藤仁  
の守は眞  
伊藤仁  
の守は眞



◎用を節  
して人を  
愛する

め、社會の爲め、父子、兄弟、一門の爲め、朋友の爲め、隣人の爲めに、時宜次第、支出して吝まないとはいふ、これでなければならぬ。これでこそ、節儉の美德たる所以は、明々白白々、復た疑ひがないのである。

岡野左内は、元と、越後の上杉氏の臣である。謙信の子景勝が、封を米澤へ移すに及んで、去つて蒲生秀行に仕へ、祿一萬石を食んだ。平生、金を溜めることが好きで、家に巨萬の財を積み、毎月二三回づつ、大判、小判、その他、小粒の金を一室へ列べ、自身、その中に寝て、それを無上の樂みとした。だから、中には、

「陋しい真似をする男だ。あんなのを吝嗇といふのだらう。」と誣る者もあつた。が、その實、吝嗇ではなかつた。一日、隣村に大喧嘩があつて、報せを受ける、列べた金銀を片づける暇もなく、急ぎ、それへ行つて、和解をさせた。そして、二晩泊つて、翌々日、歸つて來ると、金がその儘になつてゐたので、人は、

◎佛の人

ふに過さへ給  
事執心なれは  
かれと心なれ  
りかると心な  
長明

初めて左内の大量なこと、金に執着する人でないこと、金の爲めに萬事を犠牲にする人でないこと、即ち吝嗇漢でないことを知り、これに推服した。

その以前、關ヶ原の役の時には、主人景勝は、遙かに石田三成に應じて、徳川家康を倒さうと加つた。左内は、永樂錢一萬貫を取り出し、

「敢へて軍用金とは申しませぬ。たゞ、聊か將士の勞を酬むたいと存じまして……」といつて、景勝へ獻じた。

又た、馬丁に一枚の黄金を貯へてゐる者があると、奇特なことに思つて、

「人の用心は、然うなくそはならぬ。」といつて、別に、十金を賞賜した。左内は、後ち、越後守と稱し、蒲生忠郷の時になつて、病死した。愈々、危篤に陥ると、金三萬兩に正宗の刀一口を添へて、忠郷に獻じ、又た、三千金をその弟の忠知に贈つて、

「永年、お世話になりました、ほんのお禮の印でござりまする。」と告げ、その他

◎薄するに幸  
約するを人  
に施すを人  
と吝すを人  
吝と吝すを  
益軒



◎后暗 嚙皇太  
持心につよ  
もて玉とよ  
もなるは  
も金なるは  
黄もなるは  
り金なるは

朋友一同へも、親疎に應じて、五金、十金づつの管分けをし、尙ほその上に、賃金の證文は、櫃ぐるみ、奇麗に焼き棄て、しまつたとのことである。思ふに、金は、溜めるよりも、使ふ方が難かしい。品性の下劣な者でも、溜めるだけのことはする。寧ろ、下劣な者程、よく溜める。けれど、使ふことを知らない。最も適當に使ふことを知らない。吝嗇に墮するのでなければ、奢侈に流れてしまふ。用を節して、而も、人を愛することは、たゞこれ、人格の高い、理想のある者のみの能くし得る所である。

6 石部金吉の資本

前にいつた、勤儉な人は、貧富の境遇から超越してゐると、これに就いて話がある。

或る町に、石部金吉といふ金兜を作る人があつた。至極の堅人で、質素に、儉

◎塵も積  
れば山と  
なれば山と  
埋る……

約にと心がけ、生れてから嘗て美食したこともなければ、遊興したこともなく、物見、遊山などには、夢に出かけたこともない。その勘略なことをいつたら、常に、燈心を三枚におろして火を點し、香の物を鑪かきでかいて、その一筋を茶漬け飯一度のお菜といふ定法。萬事、これに應じて約ましくしたので、幾年月の後には、金を三百兩程稼ぎ溜めた。

金吉の隣家は、遊美泰庵といふ醫者で、これは又た反對に、あればあり限り酒にしてしまひ、食ふ物のある間は、呼びに來ても療治に行かず、たゞ遊び歩き、たゞ飲み明した。

すると一夜、金吉の家へ盗人が入つて、三百兩の金を、一文残さず、盗んで行つた。それを聞いた泰庵は、驚き且つ氣の毒がつて、

「可哀や金吉が、食ふ物も得食はずに溜めた金、身の膏の塊を取られて、定めて人心地もなくしてゐるぢやらう。可哀さうに」と、翌朝、早速、見舞に行くこと、











い、立派に立派にと心がけた。

折柄、京都の所司代が代つたので、定信は、事務の引継旁た、年の五月、上洛し、直ぐさま、假皇居へ参内した。天皇は、畏くも天盃を賜ひ、且つ、恩賜の品があつた。時に定信の進退、坐作は、實に恭敬を極めたもので、能く禮に協つてゐたので、天皇も、いたく御感賞あらせられた。

定信は、又た、一日、皇居の焼跡を検分した。案内の者は、定信の疲れた様子を見て、命じて床几を取り寄せ、

「些と御休息遊ばされよ。」と勧めた。けれど定信は、

「否、それには及ばぬ。」と断り、再三、勧められると、

「御炎上の跡とは申せ、御坐所近くで休息するのは、餘りに畏れ多い。」と、断然としてその勧めを斥けた。

逗留數日、所司代の引継事務も終つて、江戸へ歸ると、將軍に謁して、詳しく

◎戦々として  
氷を履て  
薄氷を履て  
深むが如く  
むが如く  
詩に經し

假皇居の狀を述べ、

「まことに恐懼に堪へ申さぬ。この上は、一日も早く御造營申し上げて、大御心を安んじ奉ること、これ、何よりと存じまする。」斯ういつて、特に、工事を急がせた。

斯くて新皇居は、寛政二年の秋に至つて、全く竣成した。規模も大きくなり、輪奐の美、復た前日の比ではない。天皇の御悦びは一方でなく、將軍家齊へは、宸翰、御製の詩を賜ひ、定信へは、太刀一口、三十六歌仙の色紙を賜うた。家齊は、謹んで恩賜を拜し、定信の功を賞めて、

「斯やうな天恩を蒙むつたのは、全く卿の力ぢや。」と、これ亦た、名刀を與へて、謝意を表はした。

定信のこの事などは、國民として、素より然あるべきで、特に異とするには足らぬ。けれど、當時の一般幕臣に對比し來る時、何人も、定信の忠順を多とせず

◎聖主は  
賢臣を以  
て賞むる  
爲すは  
實に  
論ずる  
爲すは



にはゐられないであらう。

### 2 番頭の百年目

◎己れを盡すことを忠と程い

管に皇室に對してのみではない。凡そ、仕ふる所に對して、誠心誠意、己れを盡すことは、臣たる者の道で、これを忠といふのである。

所が世には、不心得な臣が間々ある。或る家の番頭、朝、出がけに、  
「商ひに行つて参ります。」といつたのは、眞つ赤な嘘で、その足で料理屋へ立ち寄り、

「今日はお花見だ。例のものを呼んで呉れ。」と命じた。藝妓、雛妓が、ぞろぞろ、やつて来る。それを引き連れて、飛鳥山へと出かける途中、不圖、家の隠居に出遇つた。番頭たる者、驚かざるを得ない。どきまぎして、

「これは、お久しぶりで……」とばかり、後白浪と逃げ歸つた。

◎隠れたるよりあらはるゝ

はなくすこしきよりあきらかなるは孔子……

するとその晩、隠居は、彼の番頭を呼びつけて、散々、油を取つた末に、

「時に、一年三百六十五日、毎日、鼻を突き合してゐる俺に、お久しぶりとは何の事だ？」と極めつけると、番頭は、頭を掻きながら、

「はい、あんな處でお目にかゝりましたのは、私の爲めには、眞實百年目でございます。」

主人に對して、誠心誠意を缺く奉公人には、この百年目が年に二三度も來るであらう。

### 3 小野寺十内の書翰

赤穂義士の一人小野寺十内は、椿事勃發の際、京都藩邸の留守居役を勤めてゐた。凶報に接すると直ぐ、鎧一領、槍一筋、他に着替の白帷子を携へて、妻にも語らず、子にも告げず、急ぎ赤穂へ馳せつけた。元祿十四年四月三日の夜の事。

◎壯士海を得ず漢沙を成に報維



白地皆動  
李動天

十小野寺  
十母賀  
母氏九は  
高憂ひな  
強病むこ  
又傷むこ  
となし老  
業の孝思  
誰れか能  
誰識らん  
膝下猶呼

君 臣

一六八

京都を立つ時

『所司代へのお届けは、如何?』と注意する者があつた。けれど十内は、『それは、平時の作法でござる。今は、主人を失つた拙者、その儀にも及びますまいか。』斯ういつて、その儘、出發したのであるといふ。

左は、同月十日附、妻たん女への書翰である。忠孝の至情、楮上に溢れて、惻々として人を動かすものがある。これを読んで泣かない者は、忠臣でない、孝子でない。否、恐らく人でない。

六日、七日の文、昨夜、一度に達き申し候。母様、何事なうござなされ候よし、御嬉しく存じ候。随分、心をつけて、朝夕を旨きやうにして、進じ申さるべく候。そもじ、おいよ、無事、一段の事にて候。この許の事、氣づかひのよし、道理に存じ候。

一、九左衛門、治右衛門事、一兩日中に上り申すべき心組に候。それ次第、

とんで小野  
と爲す伊藤  
齋藤仁

◎士の道  
義より大  
なるは吉  
しなるは  
田松陰

その様子によりての事と見え候。我等は、存じの通り、御當家の初めより、小身ながら、今迄百年、御恩にて各のを養ひ、身も、暖かに暮し申し候。今の内匠頭殿には、格別の御情けに預からず候へども、代々の御主人、くるめて百年の報恩、又は、身不肖にて、一族も、日本國に多く候。斯やうの時に、うろつきては、家の疵、一門の面汚し、面目なく候故、節に到らば、勇ましく死ぬべしと、確かに思ひ決め申し候。老母を忘れ、妻子を思はぬにてはなけれども、武士の義理に、命を捨つる道は、是非に及び申さる所を合點して、深く嘆き給ふべからず。母御人様、幾程の間もあるまじく候儘、如何やうにもして、御臨終を見達け給はるべく候。年月の心入れにて、ちよさいあるべしとは露塵思はず、申すに及ばず候へども、頼み参らせ候。僅かの金銀家財、これをあり限りに養育し参らせ、御命、存外永く、財、盡きたらば、共に餓死申さるべく候。これも、是非に及ばず候。おいよ事、望みの御方も

小野寺十内

一六九



